

---

# ウイングテイル

さき淳也

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウイングテイル

### 【Nコード】

N8552N

### 【作者名】

さき淳也

### 【あらすじ】

閉じた大地、新地漸。「惶」の力を操るソラウィと呼ばれる翼人に統治されている国家リエラの少年フェレロは、幻の妖精ネーロを求めて訪れた断崖の底の森で孤独なソラウィの少女、テレシアと出会った。相容れぬ2つの種族……しかし記憶の底に微睡む想いが呼び覚まされるとき、ともに生きることを目指す彼等の創世への旅が始まる……遅筆ですが、お付き合い頂ければ嬉しいです。

## 第1話「ヘルダイバー」

??フェレロ??

……?

??フェレロ??どこ??どこなの??

……呼んでる?……僕?俺はここだよ

??フェレロ??見えない??見えないよ??

……もう!僕はここだって!

??ああ、私のコトネよ、どうかヴーのご加護がありますように?  
?届きますように??

「だから僕はッ!」

「な、なに寝ぼけてるのよー!せえどーよくの確認はおわった?ル  
ウラ、まちくたびれてるって!」

「あ、ああ?」

目を開けたとたん飛び込んできたくりくりの瞳、突っつきそうな  
勢いでまくしたてるその少女の表情にフェレロはちよつと驚いた。

「!……ハナちゃん?……あれ?僕ってひょつとしてっ……」

”じき”

「アタッ!」

「フェレロ?アハハハ!こわしちゃヤダよう」

「あつっ……くそっ、マスバランスか……」

羽布張りの翼の下に寝そべってたのを忘れて思わず立ち上がった  
しまつて、突き出た錘に激しく額を打ちつけてしまった飛行服姿の  
少年を見て、ぱさぱさした燈色の髪の少女はあきれた表情。

「そんな草ぼうぼうのところよく寝れるねー……ひーガサガサこ

そばゆそう！あ、ハナちゃんはやめてよ！もう子供じゃないんだからねッ！」

「ふんぬ」

「？」

フェレロと呼ばれたその少年は額をさすりながら身を起こして、そばでぷつと脹れている少女の立ち姿をしげしげと眺めた。

「ふうん……今までこうやって見た事なかったから気づかなかったけど、ハナちゃん、ひよつとして胸、大きくなってきた？」

「！？フェレ……かああ」

あつ湯気出た？耳まで真っ赤、握った腕を振り回して迫ってくるハナの可笑しさにフェレロは笑いながら駆け出した。ハンターの師匠である彼女の父親ゴラン、その剛胆さに負けないくらい活発で気が強くて、でもこの家へ身を寄せている自分をまるで兄のように慕ってくれる彼女、ハナの実在は、フェレロの毎日をいつもほんのり暖かく彩っていた。

「おい、いつまでレネリイ遊ばせてんだ？マツキナのトリガーとして使うなら少しは暖機させてやんねーと！いきなり全速かけたら息切れしちまうだろうが！」

「は、はいい！」

突き刺すように飛んでくる野太い声。二の腕にハンターの称号であるレジストが刻み込まれている男が、ふざけて逃げ回っているフェレロを一喝した。

「いいかフェレロ。いくらお前とそのレネリイが強い信頼関係にあるといっても、あれはお前の手下でもなければ家畜でもねえ。親子仲にも礼儀だ。でなければお前が内蔵を撒き散らす事になるぞ！」

「パパ！縁起でもない事言わないでよ！ルウラとはずっと仲良しだったから大丈夫なの！ホントにもう、どうしてもそんな嫌味な言い方するのよ！」

「んあ？ハ、ハナは黙っていなさい」

年頃だからか、最近聞き分けの無くなってきた娘の言葉にややた

じろいたゴランであったが、彼もマツキナを駆ってレネリイを追っていたハンターの一人、同じ途を目指すフェレロにはどうしても厳しく当たってしまう。フェレロもその事は十分わかっていているようで、遮風板のへりに腰掛けてウトウトしている、指を広げた程の大きさのレネリイのくるくるつとした巻き毛のおでこをつついた。

「ごめん、ルウラ。起こしちゃって……そろそろ出発だから準備してね」

「……？ア、アイ！」

見た目は殆ど少女のようで、でも背中には虹色の羽をもつ小さなレネリイ、ルウラはおどけて敬礼の真似をすると機体の前半分を占める妖精機関、その中枢にあたるシリンダーの中へと飛んで行った。フェレロはあつと気がついてポケットから小さな動物の人形を取り出すと、それを握りしめて筒から顔を出してきよろきよろしているルウラの傍らへ飛び降りた。

「ほら、ルウラ、忘れ物だよ」

「アイ！アー……ーイ！」

「いつも狭い所でごめんね……準備、はじめよっか？」

「アイ」

「じゃ、閉めるよ」

フェレロはシリンダーを機関中央の稼働位置に固定すると上部のカバーを閉めた。そして軽い身のこなしで運転台へと飛び乗り、手綱の右にある伝声管にむけて始動のコールを告げた。

「ルウラ、コンタクト」

「アイ」

元気な可愛らしい声、計器盤に灯がともり、中央にある沃素球の中で緑の光球がはしゃいだように飛び跳ね始めた。隣の3本の石英管を満たす液尺の境界はどれも緑の範囲内でぶるぶる上下しているのを見て、フェレロはほつとしてゴランに報告した。

「脳波明晰、血圧、心拍、呼吸いずれも正常値」

「よっし、ルウラ暖まったら行こっか？フェレロ」

「？ハナ！お前もいくのか？」

操縦台で離陸点検を進めているフェレロの後方のデッキにレネリイ捕獲用の長大なキヤプターを携えて飛び乗ったハナに、ゴランは心配そうに声をかけた。

「このマツキナは軽いから私一人くらいへーきだってフェレロ言ってた。だいじよぶ、パパの分までネーロ、捕ってきてあげるね」

「駄目だ！よりによつてタンデムでラーマへ行くなんて危険すぎる！いくらフェレロが並外れた視力を持つてたとしてもだ！いいか？あそこに降りた者はいるかもしれないが、帰ってきた奴は誰一人いないんだ！私の事は心配しないでいいからお前は残ってなさい」

ゴランのあからさまな制止の言葉に、ハナは嫌悪感を身体いつぱいにあらわして憤慨した。

「何で駄目なの？危ないってわかってるのにフェレロだけ行かせるなんて、そんなことできないよ！最近レネリイがすっかり少なくなっちゃって、パパも大事なマツキナ売っちゃったりして苦しいの、ハナだって知ってる！レネリイの中でも全身光り輝く「ネーロ」はすぐく高く売れるってパパ言ってたよね？ラーマに行けば沢山いるって……」

「だ……だからってだな」

「フェレロ、あれでもパパにすごく感謝してるんだよ！記憶をなくしちゃって何もわからないのにもいつも優しくしてもらってるって……ラーマに行くって言い始めたのも、パパにお礼がしたかったからなんだよ！だから……だからハナもフェレロの願い、かなえてあげたいの……パパにまたハンター、やってもらいたいの！」

「ハナ……」

ゴランにはもう彼らを納得させる言葉はなかった。痩せた山々に囲まれたここオーデルでは僅かな土地で穫れる作物のほかはこれと言った産業もなく、男達は周辺の森に棲息する「惶」の力を内に秘めた妖精、レネリイを捕らえそれを売却することで日々の糧を得ていた。だが彼らの乱獲のためなのか環境の影響なのか、この所近郊

のレネリイの個体数が極端に低下してしまつて、もはやオーデルの住民全体を賄うことは出来なくなっていた。多くのハンターがこの生活に見切りをつけて村を後にし、わずかに残った者達はより危険な地域へと獲物を求めて分け入っていった。しかし険しい地形や入り組んだ深い森に阻まれ、なにより彼らの空飛ぶ足、マツキナの動力の要でもあるレネリイの衰退はそのままこの稼業の凋落を意味していた。夢を求め秘境に赴いた勇氣あるハンター達、しかし彼らの殆どがその道程において自機のレネリイを力尽きさせてしまい、二度とオーデルに帰つて来ることは出来なかった。

「……ふう、翼に先立たれたハンターつてのはザマアねえな……畜生、そのマツキナが俺を乗せてくれればよう……」

「パパ……」

「わかつてるつて！F/F??フライングフェザー、ガナツシの道楽だろ?贅肉を極限まで削ぎ落として効率を追求した試作マツキナ…… あんな繊細な機体、奴しか扱えねえさ。だいいち俺がルウラに氣に入られるわけねえしな……すまんフェレロ、ハナを頼む。無理するなよ」

「ゴランさん……」

「あいつときたら強情っぱりで言い出したら聞かねえから……ったく誰に似たんだか。あ、そっぴいやお前もそのクチだったな?」

「へへ」

フェレロはすうと息を深く吸つて空を見上げた。渦を巻く断界の瘴気??ヴーの切れ端から垣間見える反対側の大地はどうやら嵐のようで真つ暗だ。雨が降つたら羽布張りのF/Fは重くなつて高く疾れない。フェレロは手綱をぎゅっと握りしめ、自らの意思を動力室でかすかに歌っているトリガー??妖精機関の触媒であるルウラに伝えた。

「ルウラ、行くよッ」

「アイ」

待ちかねてたのか、F/Fは弾けるように浮上した。吹き出す無

数の光粒が疾れるという喜びを表しているかのように踊り、ゴランはその輝きに目を覆った。

「凄え……只のレネリイからこんだけ惶力を引き出せる奴はそうそういねえぜ、よっぽど仲がいいんだな……」

「……行つてきます」

キツと見据えたフェレロの眼差しの先へ向かつて、F/Fは速るよう加速を始めた。軽量級マツキナならではの豊富な揚力はすぐに巡航高度に達し、灌木をかすめるように滑空するその操縦台にはうつすらと湿った森の空気が身を切るように集まってくる。フェレロは口元にかすかな笑みを浮かべると控えていた手綱を大きく煽った。

「ルウラ、全速だ！」

「アイ」

「きやあッ！」

瞬時に最高速まで加速したF/Fのデッキから落ちそうになったハナの手を、フェレロはかるうじて捕まえた。ドキドキ涙目のハナは我に返ると、猛烈な勢いで怒りだした。

「もお！先にちゃんと云つてよ！落っこっちゃうとこだったじゃないの！私に何かあつたらフェレロ、パパに何されるかわかんないよっ！」

「ハハ、ルウラ、今日も元気だね！これなら上手く行くよ。絶対」

まるで聞いてないようなフェレロの反応にハナはふくれっ面。でも彼の肩越しに目に飛び込んできた計器盤の沃素球、その中で跳ね回る小さな灯を目にしたハナの心には、ゴランには話せなかった不安がきりきりと呼び覚まされていた。何人ものハンターを飲み込んだ臃の森ラーマ……生きては帰れぬ魔境……もしかしたら私たちも……でもこの獵が上手くいけば、残っているオーデルのみんなが救われるんだ……ハナは微かに瞬くその「惶」に、自らの想いが無事遂げられることを願わずにはいらなかった。

「……フェレロ、ハナたち、きつと、きつと上手くやれるよね？」



「うん……ねえ、僕とルウラとハナちゃん、ずっと前から一緒にいたよね？ちかごろ夢、よく見るんだ」

「フェレロ？」

「今までずっと助けてもらってたから、今度は僕が助けないとね、ゴランさんも、ハナちゃんも」

ハナは何か思い当たるのかちょっと表情を揺らしたが、フェレロの腰に手を回してその背中に頬を埋めた。

「うん……ずっと3人で上手くやってきたんだもん……ずっと……ね……」

「アイアイアイ！アイ」

「うあ？」

急にF/Fの姿勢が乱れ、フェレロは遮風板に思いっきり額をぶつけてしまった。

「ぎあ！さつき打ったとこ！いててててててて！」

「だ、大丈夫フェレロ？こらルウラ、ヤキモチ焼かないの！」

「アイ」

二人を乗せたF/Fは涼しげな口笛を翼端から発しながら蒼の森を飛び越えて行く。その行く先には荒涼とした塔嶺が幾重にも天に向けて矛を突き立てていた。

徒歩でゆくのは不可能なほどの急峻で脆い溪谷、浸食で形成された無数の錐状の嶺をさらに深く遡上して行つた奥に「門」と呼ばれる岩壁がある。それは広大な裾野を持つ環状山稜の隆起した地点であり、空に向かって登攀した細い頂からはなめらかな円を描く稜線と足下から垂直に落ち込んでゆく断崖を臨む事が出来る。大地に穿たれた大穴……その奥は永遠に落ちてゆくかと思われる程に漆黑に閉ざされており、時折閃く燐の青白い航跡がより一層この世ではないという認識を与えてくる。マツキナを止めてその闇を覗き込む二人は、あまりの景観にただ呆然とするしかなかった。

「こ……この下が……ラーマ……」

「あの光……確かにレネリイのものだ……それも見たこともないくらい光ってる……なんて眩しいんだ……」

「……行く……のよね……」

ただならぬ恐怖にうち震える心を感じ取ったフェレロは、後ろのデッキにいるハナの方を振り向いた。今まで見せた事のない怖そうな泣きそうな、およそらしくない怯えた横顔はちよつとドキドキでも照れくさいフェレロは思わずバカな事を言ってからかってしまった。

「そ……そんな顔したってだっこしてあげないからねッ！」

「……フェレロ……お願い……ずっと一緒にいてね……ひとりにしないでね……」

「?……あ、な、何言ってんだ当たり前じゃないかそんなのは、はははは」

マジ返しされて、フェレロは自分の方がバクバクし始めてしまった。でも彼の言葉を聞いたハナはからつと表情が明るくなっていつもの調子で仕切り始めた。

「……ウン！いい？フェレロ、ネーロをたくさん獲って、もう一度ここへ戻ってくるんだからね！絶対だからね！」

「あ……ああ、だいじよぶ。そのつもりさ」

「よおーし！ルウラ、一気にぶっ飛ばしてッ」

「……アイ」

「あれ？」

「……ルウラ？」

ルウラはF/Fをちよつとだけ浮かせたがそれっきりで、何故だかそれ以上動こうとはしなかった。機関の中にいるとはいえもし墜落したら無事では済まない事を感じて恐がっているのだろうか。躊躇するように軽く翼を振ってみせる。

「ねえールウラったら！早く飛び込んでよー！こんなところで迷ってると私怖くて死んじゃいそうだよッ！」

「ハナちゃん、そんな言い方したら余計怖がつちゃうよ……ルウラ、心配しないで、どんな微かな燐の光でも見逃しはしないさ。落ちついて僕の操る方向へ機を持つてつてくれればいい。だいじょぶ、ルウラなら、きつとできるって信じてるから」

「アイツ」

再び煌の輝きに包まれるF/F、その放出量は全速飛行の時に比肩する程で、フェレロはちよつと苦笑しながら伝声管に話しかけた。「そんなに張り切らなくてもいいよ。ルウラ、ゆっくり、ゆっくり前へ出して。幻惑されちゃったら危ないからね」

「う……う……深いよお……」

そろそろと崖の縁より機体を突出させるフェレロ、眼下に広がる底なしの空洞を目の当たりにしたハナはもう息も止まりそう。鼓動が極限に達したとき、F/Fの後尾がやおら高く跳ね上がった。

「きゃあ！倒れるッ！」

「行つてくれ！ルウラ！」

「アイ！」

急激に谷底へと機首を落としてゆくF/Fが断崖面と接触する直前、フェレロは手綱に鞭を入れた。飛び込む黒い世界、今や視界の全ては闇に支配され、二人を乗せたF/Fは壁面に沿うような急角度で落下していった。揚力が殆ど無くなってしまふ垂直降下はそれだけ舵面にかかる圧力も低下してしまい、一度崩れたバランスを回復するのは困難である。フェレロは速度を増すことでその圧力不足を相殺しようとさらに推力を上げた。

「もももつとゆっくり！ゆっくり行こうよーッ！」

「このくらい舵が効かないと何かあつても避けられない。ルウラ、もう少し下げて！」

「アイツ」

少しでも地面効果を得ようとフェレロは壁面ぎりぎりまでF/Fを近づける。機体との間で圧縮され乱れた気流が小刻みに翼面を叩き直進を妨げるが、その確かな手応えはフェレロに操れるという確

信を与えてくれるのであった。

「しっかりつかまって！ハナちゃん！飛ばされたら終わりだよ！」

「わ、わかってるーッ！ねえ！な、何か見えるう？」

フェレロは集中して前方を凝視した。岩石に含まれる惶の微かな発光を頼りに先の先まで地形を追ってゆく。時折横をかすめ飛んでゆく光はレネリイの、いやネーロの輝きなのか、だが今はそんな物に視線を奪われてはいられない。確実に迫りつつある「底」にマツキナごとたたきつけられる前に何とかして制動をかけなければならぬのだ。フェレロは姿勢を乱さぬように慎重に制動板を開いた。

「フェ、フェレロ！後ろッ！」

「なに？今は振り向けないよ！」

「光が、光がいつぱい追いかけてくる！」

「！？」

ハナの言葉に顔を上げたその時、フェレロのすぐ横を長い尾を引いた光球が閃きながら、降下しているF/Fの前方に躍り出た。と、それを追うようにいくつもの光球が両舷を次々と抜き去ってゆき、フェレロはその輝きに一瞬視界を奪われてしまった。

「ネーロ！？ま……眩し……」

「フェレロ、前ッ！」

「が……岩塊？」

行く先に集中した無数の輝きを背に浮かび上がる黒い影、それは行く手を遮るように壁面より突き出した庇状の大きな岩棚であった。上か横か？迷っている時間はない！フェレロは左右の制動板を差動させ速度を維持したままF/Fを横滑りさせた。

「ぶつかるッ！」

「ハナ、じつとしてろ！ルウラ、浮いちゃダメだ！」

「アイ……」

「抜けた？」

何か擦れるような音、軽い衝撃を受けたが弾き飛ばされることなく、二人を乗せたF/Fは辛うじて岩塊をかすめた。だが目の前に

今度は青白い惶の点在する闇がぐんぐんと迫ってきた。近づくとつれてそれは信じられないくらい広大な森林である事が見てとれて、フェレロはハツとして手綱を引いた。

「底だッ！ルウラ、揚力最大！」

「アイ！」

そう言うつとフェレロは慎重に機首を起こした。気流で壁面からがされない様に渾身の力で下げ舵を打つ。翼からの下向きの揚力が壁面にたたきつけられ、激しい乱流は華奢なF/Fの機体を軋ませた。目が飛び出しそうな程の減速度が二人を襲う。

「……うぐぐう……何これ……フェレロ……」

「と……止まれええ！」

今や目の前に広がる無数の惶の輝き、それは幻想の世界への入り口のように、ともすればそのまますうつと吸い込まれてしまうような錯覚を覚える。フェレロはいくつも突き出した梢のわずかに上で力一杯手綱を引き、機体を滑空へと入れた。翼が大気をとらえ、瞬時に壁面から引き剥がされたF/Fは残存推力を一身に受けとめ大きく撓る、重力は搭乗する物の身体の機能をずしりと奪い、その骨ごと押しつぶされそうな力に二人は歯をくいしばった。

「め……目の前が……まっしろだよ……」

「……お……お腹で息しないと……はああ！」

ふわりと浮いた機体は徐々に勢いを失って、ゆるやかに高度を下げてゆく。減速による貧血で朦朧とする意識の中でフェレロは何とかF/Fを水平飛行に導くことが出来た。猛烈な脱力感、でもフェレロは満足気な笑みを浮かべて機体を傾け、翼下に広がる薄暗い森を見つめた。

「はあ……き……来たぞ……ここが、朧の森ラーマ……や……やつた……」

木々の間にとどころに煌めくネーロの軌跡、しばらく追って行ったその先にはぼんやりと揺れる大きな輝きの波が見える。

「泉？こんな所に惶泉があるなんて……でもよかった。これで降り

られる」

フェレロはホツとして、その畔へと機首を巡らせた。

降着用のスキッドで水面を走ることと速度を落としたF/Fは、ようやく湖水の畔と森の間のわずかな草原にその機体を接地させる事が出来た。よくもあんな速度から止められたものだとも自分でも信じられないフェレロは、しかし翼端を少し掠っただけでどこも破損していないF/Fの外観を見てちよつと得意な気持ちになった。これなら今度のジャントウユでもいいポジションを疾れるかもしれない……フェレロは機関を停止する為にキルスイッチを操作しようと手元に目を落として、その灯の消えた真つ暗な計器類を見て愕然とした。

「こ……これは……機関が止まってる？……まさか！」

フェレロは慌てて操縦台から飛び降りると動力部のカバーを固定しているキャッチに手をかけた。

「熱ッ！……いけない……ルウラ、無理させた？」

あまりの熱さに手袋が溶ける！突き刺さるような痛みには一度は手を引っ込めたフェレロだったが、その灼熱の中にルウラがいると思うと……！フェレロは手袋を投げ捨て、素手でもう一度焼けた取っ手を握ってロックを外し、妖精機関を覆っているカバーを跳ね上げた。中央部を貫くように勘合しているレネリイを格納しているシリンドーの緊急解放艇が固着していて動かない！フェレロは渾身の力を込めてまだ放射で揺らめいている棍を引いた。

「ルウラ！大丈夫か？がんばれ！今出してやるから……うわっ！」

何かが外れる音がしてフェレロは後ろにひっくり返った。吹き出す大量の蒸気、開いた？……もうもうと立ち上がる煙を見たフェレロは焦ってその中へ飛び込み、手探りでシリンドーのもとへと駆け寄った。

「ルウラ！ルウラ！おい！返事してくれ！」

「……ア……アイ……」

蒸気の噴出が収まってようやく露となったシリンドーの中、力なく横たわるルウラは全身に酷い……その翼まで消失してしまう程の火傷を負っていた。抱いてやるうにも溶けた皮膚がシリンドーの内筒に焼き付いてしまっていて、もはや動かす事も出来ない。フェレロは溢れてくる涙に瞳を曇らせながら、その灰色に変色してしまつた前髪にふれた。

「ルウラ……ごめん……こんなになつてゐるって思わなかつた……頑張つたんだね……すごく頑張つちやつたんだね……」

「……ア……イ……」

微笑んでみせるルウラに、僕は何もしてあげる事が出来ない……自分の不甲斐なさにフェレロは、焼けて腫れ上がった手をぎりりと握りしめた。

「……う、うう……フェレロ？」

気絶していたハナが気がついた時、その目に映るフェレロはがっくりと肩を落として、火傷を負つた拳を震わせていた。自分が何をしていたかとも思い出せないくらいばやけた、まだくらくらする頭で彼のもとへとやってきたハナは、目の前の焼けただれたレネリイを見て衝撃と共に強引に現状を受け入れさせられた。

「そんな……ルウラが……ルウラがこんな……」

「僕が馬鹿だつたんだ……今までF/Fを上手く操れたのはルウラのおかげだつたのに……調子に乗つてこんな所まで……」

「フェレロ……これから……これからどうなるの？」

「……」

薄暗い無彩色に沈む森の中に息づく泉の水面は惶の輝きで淡く揺らめき、その輝きに惹かれてなのか、どこからともなくたくさんの光球が二人の周りに集まつてきた。

「……ネーロ？ああ、さつきはありがとう……教えてくれたんだよね、あの岩棚を……」

「……」

気がつくともハナはデッキのキャプターを掴んで、おもむろにネー口達に向かって振り回し始めた。

「……ハナちゃん？」

「だれか！誰でもいいの！私たちを助けてよ！ほら、はやく捕まんなさい！」

降下するF/Fを追い抜く程の速さを持つネー口が、やみくもに空を切るハナの大人用の重いキャプターに収まるはずもなく、程なくハナは肩で息をしながらその場に座り込んでしまった。

「ハア……ハア……どうして……ハナ……こんなところで死にたくないよ……」

「ハナちゃん……たとえ誰かが助けてくれるとしても、ルウラをシンダーから動かすわけにはいかないよ。そんな事したらルウラはすぐ……ぐす……無理だよ……僕達、ずっと一緒だったんだから……」

「ああ、ルウラ、僕が見えるかい？……ハナちゃんも……みんな……」

「……みんなそばにいるよ……」

「……でも……」

無茶苦茶にキャプターで脅かしたお陰で散り散りになったネー口達が再び二人の、そのマツキナの動力部で惶力を使い果たしてしまったルウラのもとへと集まってきた。惶泉の漣の奏でる神秘的な囁きの中、ネー口のひとりひとりがその耳元に舞い降りてひざまづき、何かをささやいては飛び去ってゆく光景をただ呆然と見つめているフェレロとハナ。お別れの……たぶん……その瞬間が来るのを物悲しさと空虚さの入りに交じった想いで見つめている二人の耳に凜とした、けれどもどこか懐かしいあたたかさを纏った声が響いた。

「その子は……あなた、まさか……フェレロ……なのですか？」



## 第2話「フューリー」

空は遙か天上に小さく切り抜かれ、その遠い光は暗闇に包まれた地の底を照らす事はない。それでもここが朧の森と呼ばれているのは、木々の間に点在する輝く水面の泉　　惶泉と、それに惹かれるようにどこからか集まってきたネーロ達の燐光によつて、あたかも森自体が発光しているかのように浮かび上がって見えるからだ。そんな人間　　ヒュピアの世界とは隔絶された闇の中で、突然呼びかけられた生々しい肉声に二人は戦慄した。ハナは驚きと恐怖に思わず声を上げる。

「きゃあッ！」

「だ……誰だッ？」

振り向いて身構えるフェレロ、その暗がりでもよく見える目はマツキナとは反対側の森の中で、青白い人影が木立から半身をのぞかせて立っているのを見つけた。

「ん？あそこに……」

「出た……！……！」

「ハナちゃん？……大丈夫、ほら、よく見て……誰がいる」

薄明かりの中でもそれとわかるほど白く繊細な肢体と艶やかな長い髪はなるほど獣の類いではなさそうで、フェレロはほっと胸を撫で下ろした。

「こんな所に……ネーロを探しに来た仲間？……じゃ、なさそうだね……」

「……フェレロ……？」

頭を抱えてしゃがみ込んでいたハナはおそろおそろ立ち上がつて、湖畔の森を見つめるフェレロの視線の先に目をやった。ああほんとだ、女の子？……私と同じくらいかな……キレイな目……目？やだ、こんな真つ暗なのにどうして見えるの……ひっ！不意にハナの表情が陰しくなった。口もとで憎悪をかみしめ、握った拳がぶるぶると

震え始める。

「フェレロ、あの子の目……あの輝き……ソラウイ!?」

「……ハナちゃん?」

ハナの言葉に、フェレロは少女の顔を追った。この暗がりであって彼女の両の目は惶泉よりもはるかに明るく、あたたかな、けれどどこか粗暴な力を感じさせる光を放っていた。惶の力を自在に操る翼人、ソラウイを前に思わず身構える二人。けれどその少女はゆるやかに纏ったローブを靡かせ森から歩み出ると、どこか育ちの良さを感じさせる控えめな口調で話しかけてきた。

「あ……あの……先ほどは失礼いたしました。つい……あの方にそっくりな佇まいでしたから」

「……あの方?」

そう言いながらフェレロのすぐ側までやってきた少女に向けて、突然鈍い輝きが周囲の空気を切り裂きその頭上へと叩きつけられた。

「……あつ……」

「なれなれしく話しかけてんじゃないわよ!この人殺し!」

「……ハ、ハナちゃん?」

ハナの振り下ろしたキャプターの打撃を頭部に受け、少女はその場にうずくまった。前髪からのぞく額に一筋の血が流れてゆく。ハナはなおもその棍を振りかざし、怒りをあらわにして言葉を続けた。  
「こんな所に隠れて、今度はどこをおそうつもり?そんな事はさせないわ!みんな……みんなやつつけてやる!」

「や、やめろよハナちゃん!女の子だけど、この子はソラウイなんだ!僕らじゃかなわないよ!」

「でも!コイツらは……コイツらは私たちのツ!」

ハナはキャプターの先端を伏している少女の首もとへと押しつけ、小突いて顔を上げさせた。無理矢理上を向かせられたその表情は怯えと懺悔の念に曇り、光ゆらめく瞳には涙が浮かんでいる。少女は声を詰まらせながらハナに謝罪した。

「……ごめんなさい……フェルビナクの方たち……ほんとに……ほ

「ほんとにごめんなさい……」

「な……なによ今さら！あやまったって、死んじやった人は帰ってこないのよ！母さんや弟や……焼かれちゃった人たちを返して！返してよ！」

「ハナちゃん……何の事言ってるの？」

「そっか、フェレロは……事情がよくわからないフェレロをハナは悲しげな眼差しで見つめた。私も……私も、フェレロのように何もかも忘れてしまえたら……決して消えることのない辛い記憶、その元凶を目の前にして冷静でいられるほどハナの心の傷は浅くはなかった。」

「あなたたち翼人と仲良くしようって、王さまやパパたちは一生懸命だった……でも翼人は、そんな私たちを裏切った……こわして、燃やして……そして、国までもうばった！」

「……確かに……それはまぎれもなく私たちソラウイの過ちのもたらしたもの……そのひとりとして、私は罰を受けてしかるべきです……」

「じゃあどうして？こんなだれも来られないような所にこっそりかくれて……言いなさいよ！今度はどこの街を焼きはらおうっていうのよ！」

ハナはキャプターの手元の引き金をひいた。本来は行く手をさえぎるツタを払うために備わった刃が両脇に飛び出し、惶泉から届く光を受け青白く周囲を閃かせる。それを見た少女は苦しそうに上体を起こすと、両手を胸の前で合わせてハナを見上げた。

「……私は、そのつもりはありません……ですが、もし信じられないのであれば、この場で私を討って頂いてかまいません。それで少しでも、私たちの罪が許されるのでしたら……」

「な……何よう……いい人ぶっちゃって……そんなソラウイにみんな……みんな殺されたのよ……」

「ハナちゃん！やめろ！」

激情がハナの身体を駆け抜け、刃を光らせたキャプターが死の円

弧を描き出す。少女の首筋へとまっすぐに落とされた鋭利は、しかし次の瞬間何かに阻まれて突止した。

「！」

硬質な反動によるけるハナ、見ればハンター用のガードを装着した両腕を頭の上で組んだフェレロが少女の前に立ちふさがり、ハナのキャプターを受けとめていた。

「フェレロ！」

「ハナちゃん！この子は何もしてない！彼女だって、この世界に暮らす僕らの仲間なんだ！」

「だって……だってコイツらが……コイツらがあ！」

ハナはその場にへたり込むと声を上げて泣き始めた。今まで見た事も無いハナの怒りと涙、そして自分の知らない過去が見え隠れする言動にフェレロは当惑した。ハナちゃんに母さんや弟が？……そしてソラウイに……僕は……僕はその時、何をしていたんだ……空虚な記憶は意識の草原をただ吹き抜けてゆく。フェレロはハナの前に膝をついてその肩を抱いた。

「ハナちゃん……ごめん……僕は……」

「……うつうつ……いいの……いいのよフェレロは……こんな思いをするのは……もう……ひっ……」

むせび泣くハナに寄り添うフェレロ。その後ろ姿を見つめる少女の耳にはたった今ハナへ、そして自分へと向けられた少年の言葉が幻聴のようにまわりついていた。そう……いつも……そう言って私を……彼女は何かを確信したかのように顔を上げ、ふらつきながら立ち上がると少年の背中に話しかけた。

「あの……やはりあなた……フェレロ……なのですね？」

「……？」

再び呼ばれた自分の名にフェレロは振り向いた。長い髪を煌石の珠でまとめた少女は微笑みを浮かべて顔をのぞき込む。しかしその笑顔の理由がわからないフェレロには、ただ漠然とした薄気味悪さしか感じる事が出来なかった。

「君は誰？……どうして僕の名前を知っている？……」

「……フェレロ……私です……テレシアです」

テレシア　覚えの無いその名前にフェレロは少女の顔をまじまじと見返した。ソラウイ特有の、身体から湧き出す惶のゆらぎで潤んだように見える鮮やかな緑の瞳。流れるような光色の髪に端正な顔立ち……けれどもどうしても、フェレロは目の前の少女と自分との関係を位置づけることが出来ない。向けられた羨望の眼差しから逃げるように、フェレロは目を伏せて少女に言った。

「あの……ごめん……僕は確かにフェレロだけど……その……人違い……じゃないかな……君のこと、よくわからなくて……」  
「……え……そう……ですか……」

テレシアと名乗る少女は一瞬信じられないといった表情を浮かべたが、すぐにうつむき寂しそうに小さく吐息を漏らした。差し伸べた手を途中で止めて……フェレロの怪訝そうな表情は言葉を失わせ、失意の色を浮かべたテレシアは無言で彼の前を通り過ぎて行った。浮かび上がる波紋、水面のゆらめきに照らされるF/Fのそばに佇むテレシアを釈然としない思いで見つめるフェレロは、不意に自機のレネリイの容態を思い出して焦ったように立ち上がった。

「そうだ！ごめん、ハナちゃん、ルウラが大変だったんだ……マツキナの所へ行ってるね」

さらさらと寄せては返す波の調べが木々のざわめきとこだまし、集まってきたネーロ達が手を取り環を描いて光を灯す泉の畔で、フェレロはF/Fの機関部に横たわる小さなレネリイを見守っていた。天上からは七色の光を帯びたヴーが静かに降りてきて、それは魂を連れ去る使者のように厳かにルウラの周りを覆い始めた。今にも消え入りそうな息の音、今のフェレロに出来ることと言えば、その旅立ちの途があたたく安らかであるように願う事くらいであった。出来れば、このまま時間が止まって欲しい……ルウラを連れて行か

ないで欲しい……声を上げて叫びそうになるのをぐっところえて、小さな命に優しく語りかけ続けるフェレロ。その横顔を見つめていたテレシアは静かに彼の側に立つと、両手を前へとかざした。

「ルウラ……痛くない？……だいじょぶ……こわくなんか……こわくなんかないから……ぐす……」

もはや声すら出す事も出来ず、潤んだ瞳でじつと見つめ返してくるルウラの姿にフェレロは涙が止まらない。彼女との想い出が次々に脳裏に浮かんでは消え……でも、思い出すのはオーデルに来てからの事ばかり。ねえルウラ、僕たちって、いつから一緒にいたんだろ……いや……もう……もうそんな事はどうでもいいんだ……ルウラ……大好きだよ……ずっと……傷心のフェレロが今一度、愛しい小さな頬に触れようと手を伸ばした時、突然周囲が眩い程の煌の輝きで包まれた。

「！……なに？」

「惶なる命……汝と共にあらんことを……」

フェレロは傍らにいるテレシアを見て驚愕した。全身から溢れ出す翠の輝き……彼女の身体は白く噴出する光に包まれ、背中からはレネリイのものとは桁違いの長大な虹色の翼がはるか上空まで闇を切り裂いていた。今まで人の話などでは知ってはいたが、實際目の前で見るとソラウイの「惶波」は聞きしにまさる凄まじさで、フェレロは思わずあとずさりしてしまった。涙にくれていたハナもこれまで見た事も無い程の強烈な放射を背に受け、振り向くと呆然と立ち尽くした。

「この輝き……なんだろう……あの熱い光とはちがう……」

テレシアの両手から放たれる光のベイルはルウラの収められたシリンダーを幾重にも覆い、それは今まで感じたことのないほどの命の温もりをその場に在る全てのものに施していた。ハナは恐怖を忘れて、二人のいるマツキナの所へ駆け寄って行った。

「フェレロ……なに？……ルウラに……ルウラに何をしてるの？」

「テレシア……？」

ルウラを包み込んでいたヴーはその限りなく明るさを増す波動を忌み嫌うように萎縮して、再び上空へと押し戻されてゆく。今や光のベイルはフェレロやハナをもその輝きの環の中に抱いて広がり、二人は心が空に羽ばたいてゆくような安らぎと解放感の中に溶けていった。

「な……何？……キモチが……キモチが飛んでゆく……」  
「……こ……この感じ……どこかで……」

ルウラ、フェレロを……フェレロをお願いね

「テレシア？」

どれほど時がたったのだろうか、気がつけばフェレロとハナはFノFのスキッドを背に座り込んで眠っていた。周囲にはもう人影も、ネーロの姿さえもなく、蒼く揺らめく惶泉の輝きだけが彼らのまわりをぼんやりと照らしている。フェレロはハナを起こさないようにそっと立ち上がった。

「……テレシア……夢だったのか？……」

見渡す湖は心なしかさつきより明るく見えて、フェレロはそれに惹かれるように畔へと降りてゆくと、蒼を映しこんだ鮮やかで澄んだ湖面の水をすくって飲んだ。乾ききった喉に沁み渡る鮮冷な进りが朦朧とした意識を呼び覚ましてゆく。フェレロは軽く頭を振って我を取り戻すとFノFの方を仰ぎ見た。

「……ルウラ……埋めてあげなきゃ……」

静寂に包まれた湖畔に翼を休めるマツキナの滑らかな表面に躍る光の襞。重い足取りで来た道を辿るフェレロは、虚ろな心にしみるその幻想的な光景にたとえようのない喪失感を感じていた。張りのある曲面で構成された胴体はまるで生き物がうずくまっているようにも見え、リブで波打った翼は今にも羽ばたいてゆきそうな躍動感に満ちている。

「……でも、もう飛べないね……」

フェレロはF/Fの擦れた翼端をなでると機体の正面にまわった。F/Fの顔とも言える彫金で装飾された冷却グリル、その格子の奥に……何かが、仄かに光っているのが見える。フェレロは目を疑った。

「え……ルウラ？……まだ……まだ生きてるの？……ルウラッ！」

速まってゆく鼓動、その心音を耳で感じつつあわててフェレロはF/Fの機関部に取りつくと、おそろおそろシリンドーの中をのぞき込んだ。

「ルウラ？」

「アー……イッ！」

「うあ！」

突然飛び出した眩い輝きにフェレロはあやうく転びそうになった。いままで見たこともない、そう、さっきまで一緒にいたネーロ達と比べてもひときわまぶしい光を身に纏ったレネリイは、フェレロの周りをくるとまわるとその顔にはほを寄せてきた。

「君は……ルウラ……まさか、ルウラなの？」

「アイ！」

「ルウラ……ほんとだ……よかった……ほんとによかった！」

すっかり元気になっているルウラの姿に目を輝かせて喜ぶフェレロ、その身体は燃えるような燐光に包まれ、レネリイとは思えないほどの惶を放っている。フェレロは彼女の中に息づく限りなく大きな意志に気がついて、その面影をルウラに重ね合わせながらつぶやいた。

「……そうか……あの子が……テレシア……」

怒りに我を忘れたハナに酷い事をされたにもかかわらず、瀕死のレネリイに生きてゆく力を授けてくれたソラウィの少女。その優しさがとても嬉しくていとおしくて……言葉で言い表せないほどの気持ち、どうしてもそれを彼女へと伝えたくて、フェレロは色のない暗い森に向けてその名を叫んだ。



「テレシア！どこなの？あの……ルウラを助けてくれてありがとう！さっきは……さっきはごめん……傷、大丈夫なの？手当てしないと……だから……もう傷つけたりしないから……テレシア！」

フェレロは精一杯の声で静寂に呼びかけながら、自分の中にどこか懐かしい、けれど突き刺さった棘のように引つかかる空白の存在を感じていた……何だろう……真っ白な……こんなに恋しくて、こんなにチリチリして……不思議な思いを胸に、どこまでも続く木々のその奥を凝視するフェレロの前に突然、ろれつの回らない口で何かを叫んで走ってくるハナの大あわてな顔が飛び込んできた。

「ふえふえふえフェレロ！そこそこ！ネ、ネーロだッ！はやくつかつかまえ……だあ！」

「ハ……ハナちゃん？」

キャプターを振りかざして来たのはいいけれど、ぬかるんだ地面に足をとられてずっこけてしまったハナ。フェレロは大笑いしたくなるのを必死にこらえて、浮き立つような声で草の上に突っ伏しているハナに言った。

「ハナちゃん、このネーロは逃げないよ！だって見てよ、ほら、この子、ルウラなんだよ！」

「えーーーーーー？」

顔からいつてしまつて土まみれのハナは、でもそんな事など忘れてしまう程の驚きよう。飛びはねるように立ち上がったハナの目の前にルウラは光を振りまきながら飛んできた。

「アイ！アイ！」

「……ほんとだ……ルウラ、やけどなおってる……フェレロ！」

「……テレシアさ……テレシアがなおしてくれたんだ……」

「あのソラウイの子が？……じゃあ……それじゃあハナたち、ここから出られるんだ！オーデルへ帰れるんだ！キャハハ！」

小躍りして喜ぶハナ。けれどフェレロはテレシアの行方が気になつて仕方がない。喜び合うルウラとハナのとなりで、フェレロは吸い込まれそうに暗い森の奥を見つめて言った。

「テレシア、さがさないと……」

行けども行けども変わらない景色、薄明かりに浮かび上がる木々の影はときおり不気味な表情を描き出し、そのたびにハナはフェレロの二の腕を握りしめた。ルウラの灯す光を頼りにテレシアを求めてさまよう二人はやがて、鬱蒼とした森の中に忽然と現われた広場に出て来た。開けた頭上からの冷やかな風が枝を揺らし、汗ばんだ身体に心地よく吹き抜ける。フェレロは大きく息を吸い込むと傍らのハナに言った。

「ちよつと休もつか？」

「うううゝ、気持ち悪いよおこ……ねえフェレロ、こんなとこいつまでもいないで早く帰ろうよゝ」

「ごめん、あの子……テレシアが心配なんだ。それに……」

逆上していたとはいえ、ハナはテレシアを傷つけてしまった事を後悔していた。それでも、肉親や兄弟を奪った翼人を助けるなんてハナにとっては全くおもしろくない事なのであった。できればこの手で仇を討ちたい……なのにフェレロはソラウイの子、テレシアの事を心配してばかり。そんな、自分の気持ちなんか全然わかってくれない態度に腹が立って、ハナは思わず悪態をついた。

「もう！フェレロ！いつまでここにいろつもりなの？ソラウイやレネリイは惶泉があれば生きていけるけど、わたしたちの食べるものなんかここにはぜんぜんないじゃない！ハナ、こんな所大キライ！」

「ごめん、ハナちゃん。けど……せつかく元気になったルウラを、またあんなつらい目にあわせる事なんて出来ないよ……だから……何か方法がないか聞きたくて……」

「……それであの子を？……ふん、ほんととは気になってしかたないんでしょ！キレイだし」

「ハナちゃん？」

「どうせ……どうせハナなんか……もう知らないッ」

困惑の表情を浮かべるフェレロに、ハナはむっとして背中を向けた。近くにいと何だかいろいろ言ってしまうそうで……荒っぽい歩調で広場の端の茂みまでやって来たハナは、これ見よがしにぶつぶつ言いながらその場にすわりこんだ。無言の時間……二人の間の何だか険悪な空気を感じ取ったのか、心配そうな顔でハナの所へ様子を見に行ったルウラがその輝きで暗がりを照らした時、浮かび上がった光景にハナは絶叫した。

「い……いや……！」

「ハナちゃん!？」

駆け込んで来たフェレロが見たもの、それはゴランの乗っていた物と同型のマツキナの残骸と、傍らで朽ちて髑髏をさらしているハンターの亡骸であった。見渡せばこの広場はもともとあった木々をなぎ倒して出来たもので、フェレロはこの地でのハンターの哀れな末路を思い知らされた。腰がぬけて座り込んだままのハナ。ルウラはマツキナの機関部に顔を近づけて、何かを呼び掛けながらカバーを叩いている。仲間の変わり果てた姿にフェレロは、運命の暗雲が自分たちの上に重く覆いかぶさってくるのを感じた。ここは……確かにここは、僕たちの生きる場所じゃない……

「ルウラ……そこは開けない方がいい……たぶんこの人と、同じだよ……」

「……フェレロ……やっぱりハナたちも……ハナたちもお！」

半ベソかきのハナの頭にそつと手をやるフェレロ、その光景を見ていたルウラはぱつと輝きを増したかと思うと急に森の上へと翔いた。そして周囲をきよろしたあと、F/Fで降りて来た惶泉の方向へと燐光をまき散らしながら飛び去って行った。フェレロはあわてて声をかけたが、あたりは再び薄明かりに沈む無彩色の世界になってしまった。

「ルウラ?……あ……行っちゃった……」

「……ぐす……フェレロ……」

恐ろしくて悲しくて、小さく縮こまって震えているハナをフェレロは抱き寄せた。伝わってくるあたたかな温もり、それは彼女がここにいて、同じ時間を生きているということ。この冷たい空気に覆われた孤独な地の底で、フェレロは腕の中の不安でつぶれそうな命が自分の手に委ねられているという事に気がついた。そうだ……今、ハナちゃんを守ってやれるのは僕しかいないじゃないか……うん……しっかりとしないと……フェレロは下をむいたままのハナの耳元にささやいた。

「ごめん、ハナちゃん……ネーロ、捜しにいこっか？」  
「うん？」

優しい言葉にそっと顔をあげたハナ、けれどその涙目はフェレロの背後に現れた光の放射に大きく見開かれた。増してゆく輝きが息を飲むハナの顔を明々と照らし出す。

「フェ……フェレロ……あれ……」

フェレロはその光の方向に目をやった。森の向こう、F/Fを着陸させた惶泉の方向に不思議な輝きが立ち上っているのが見える。

これは……惶波？……高く上空を照らした光はやがて一点に集まり、物凄い勢いで二人の方へと弾け飛んで来た。一気に迫りくるまぶしい塊にフェレロは思わずハナの頭をおさえてその場に伏せた。

「危ないッ！」

大きな質量が頭上をすさまじい速さで通り過ぎ、後流は突風となつてフェレロとハナの上に叩きつけた。吹き飛ばされた草葉が渦を巻いて舞い、伏せている二人の上にはぱらと振りつもる。周囲に反響する耳を圧迫する衝撃波、つんざくような高音の中に聞き覚えのある旋律を感じたフェレロは、おそろおそろ顔を上げてみた。

「な……何が？」

よたよたと定まらない機軸、しかしそのマツキナは目の前で今まで見た事も無い機動？？ホバーリングを実現させていた。揚力を得るための速度が全くないのにふらふらと宙に浮いているF/Fを目の当たりにしたフェレロは驚いて、手の届く高さで着陸に躊躇して

いる機体のスキッドをつかまえて足をかけ、蹴上ってその運転台へと飛び乗った。

「ルウラ？動かしてるのは君なのツ？」

「ア、ア、アイツ！」

少し焦り気味なルウラの声、フェレロは表示が狂ってしまつて役に立たない計器類を見て苦笑いすると、静止時の重心を探して均衡を保った。

「すごいな……こんなこと出来るマツキナなんて見たことないよ……

……ほら、来て、ハナちゃん！」

フェレロは体重を偏らせてF/Fの機首をハナの方へ向けた。惶の粒子があふれんばかりに翼の下面から吹き出している。目も開けていられないくらい白く輝く光の中で、ハナは差し出されたフェレロの手を握りしめた。

「でも……フェレロ……乗っていいの？だつて……」

「ルウラが言つてる……テレシアに頼まれたつて……そのための力を、私にくれたんだつて……」

「……力？」

フェレロに機上へと引つ張り上げられたハナは、トリガーの脳波を表示する計器盤中央の沃素球が虹色に光っているのを見て驚いた。これはさっきの……テレシアが惶波を放ったときに現れた翼と同じ輝き……惶のひかり……ソラウイの力がルウラに……私たちに宿っているんだ……ちょっとしゃくにさわるけど、これで帰れるんだから、命の恩人つてことになるのかな……力をみなぎらせるマツキナの機上で、ハナは心の中のテレシアへの憎悪が薄らいでゆくを感じた。

「行くよハナちゃん！ルウラ、思いっきり飛ばう！」

「アイツ！」

フェレロの声に、F/Fは猛然と上昇をはじめた。翼とか空気だとか、そんなものなど一切無視しているかのように垂直に、振り向けば森の梢がどんどん小さくなってゆく。規格外のトリガーの過大

な惶力に機関が悲鳴を上げ、石英管の計器が割れて飛散する。フェレロは強烈な加速度にのけぞりながら伝声管をつかんで叫んだ。

「ル……ルウラ！無理するな！また……またあんなになっちゃったら……」

「アイ、アイ、アイ、アイ、アイアーイ」

「……ルウラ？」

楽しげに歌をうたっているルウラの声にフェレロは思いつきり脱力してしまった。この余裕……ハナちゃん、ひよつとしたら僕ら、すごいネーロを見つけちゃったみたいだ……目の前にぐんぐん迫ってくる明るい空、F/Fは立ちこめる冷たい大気を切り裂いて一気にラーマの闇を抜けた。余剰の惶がきらめく光の粒をまき散らす。その天に向かう輝く航跡を、テレシアは暗い森の奥からずっと見送っていた。

「ねえフェレロ、せっかく手に入れた、って言うか生まれ変わったって言うか、とにかく無事にネーロを見つけれられたわけなんだけど、あの子、売っちゃうの？……」

鳥のように軽々と快翔するF/Fのデッキで、ハナは少し寂しそうにフェレロに話しかけた。ネーロをいっぱい取ってきて、村の人たちを喜ばせてあげたかったのに……ハナは眼下に広がる枯れた畑を眺めながらため息をついた。

「まさか、ルウラは売らないよ」

「……そうだね、ルウラはフェレロの友達だもんね……」

当然といわんばかりのフェレロの返事に、平静を装ってあきらめの答えを返すハナ。はああ……むだ足だったのね……がつくし……けれどそんなハナの心境とは裏腹に、フェレロは押さえきれないほどの高揚感に身を昂らせていた。その横顔に見せる野心にあふれた眼差しに、ハナはちよつとやな予感がしてフェレロに聞いた。

「ね……ねえフェレロ、よくわかんないんだけど……こっちって、

オーデルの方角なの？」

「いや、チエカへ寄って行こうと思うんだ」

「な、なんで？あんなソラウイばかりのガラクタの街へ……あー！」

企みに気がついたハナに、フェレロはくすつと笑いかけた。

「ハナちゃん、今度のジャントウユ、絶対勝つからね」

### 第3話「スパルビエロ」

断界の瘴気、ヴー。それは気流の気まぐれによりよどみ、また何者も追う事のできない速さで渡りゆく形を持たない空の壁である。

鮮やかに、またあるときは無気味に輝く光のひだはまるで感情を持っているかのようにいきいきと表情を変えてゆき、新地漸の人々は地上からそれを見上げては様々な事象の予兆としてきた。ソラウイの力を得たルウラのおかげで高空を流れるヴーの下限まで上昇できるようにになったF/Fのフェレロとハナは、初めて間近で見るその情念の奔流に驚きの声を漏らした。

「……すごい……いろんな色が……何が光っているんだろう……霧も、雨も、稲妻もここから生まれるのかな……」

「うわぁ……キレイだね、フェレロ……でも、これがあの死の雲だなんて……」

「ああ、うかつに中に入っちゃ危ないな……おっと」

乱流によりちぎれ飛んできた光る塊を減速してやりすごしたフェレロは、ラーマで目の当たりにしたヴーの訪来を思い出していた。

死のある所に現れる不吉な影、過ってその中に踏み込んだ者は精神の異常をきたし狂人と化すという……しかしあの時見たヴーは優しい輝きで逝こうとするルウラをつつみこみ、慈しみむようなゆらぎに満ちていた……フェレロはあらためてうつろうヴーの渦を見つめた。

「あの中には……そしてあの壁の向こうには一体、何があるんだ……」

「フェレロ、県境！哨戒のソラウイに見つかったらうるさいよ！」

「え？あ、ああ、わかった。ルウラ、いいかい？ただのマツキナのフリするんだ」

「アイ！」

今や眼下に迫ろうとする大地を覆う光る水面。新地漸随一の大き



さを見せつける惶湖ビルケウの中央に築かれた首府を遠くに認めた  
フェレロは、湖畔に広がる森に身を隠すようにF/Fの高度を下  
げた。地表に記された道標に目的地の名を見つけたハナが斜め前方を  
指差す。

「チエカは……こつちの方が狭いけど近いみたいよ、フェレロ」

「わかった、ルウラ、ゆっくり、低くね」

「ふあゝアイ」

「あら、眠いのルウラ？」

「ア……アイ！」

「あはは、ごめんごめん。あれだけ凄い飛行したんだから無理ない  
よね、いいよルウラ、少し休もう」

フェレロは豊潤な惶のベイルに包まれるビルケウの畔にマツキナ  
を着陸させた。解放した妖精機関のシンダーから飛び出たルウラ  
は眠気なんかどこ吹く風、大喜びでその光の中へと翔いて行つた。  
飛びっぱなしだったフェレロとハナも久々に踏みしめる大地の感触  
にホッと安心して、湖から吹く風に穂先を靡かせる草原に腰を下ろ  
した。湖面はゆらめく光芒を空に向かって放ち、ヴーに覆われて薄  
曇りがちな新地漸にあつてまるで別世界のような明るい色彩をこの  
地にもたらしている。ハナは何とか脱出してきた朧の森ラーマとは  
正反対の色鮮やかな景色に目を奪われながらも懐かしく、また胸を  
えぐるようによみがえってくる光景に心を波立たせた。

「なんだか……夢みたいだね……」

「え？」

「……フェレロ、ソラウイってどこから来たんだろう？」

「さあ……僕たちヒュピリアとは別の世界の人たちなんだろうな……  
羽生えるし、火とか光を自在に操れるみたいだし」

「……うん……ねえ……フェレロは、ソラウイのことどう思う？」

「どうって……今、この国、リエラを治めている人たちでしょ。強  
い軍隊をもつて、僕らヒュピリアを守ってくれてる……」

「……だ、だよね……」

ハナは小さくため息をついて湖の彼方を見つめた。そう、ここはソラウイの統治する新地漸の盟主、リエラ……ひと握りのソラウイがその惶の加護によって多くのヒュピアを統べている王国……いや、帝国って言ったほうがいいかもしれない。ヒュピアに対する厳しい制限と身分制度……もうここには、私を包み育ててくれた自由と友愛はどこにもない……ハナはぼんやりと陽炎の彼方に見え隠れする首府の尖塔に自分の心の光景をだぶらせてしばし懷想するのだった。そんなハナの傍らでフェレロは誰に言うでもない口調でつぶやいた。

「あそこで、何があっただろうね……」

「……ん？」

「うん、この景色見ると、なんだか胸が苦しくなるんだ……変だよね、こんなにきれいなのにさ……」

「フェレロ……！」

「え？どしたの？ハナちゃん」

急に色を変えたハナの表情に、フェレロはきよとした。

「え？……な、ななんでもないなんでもないってへへへ」

「？」

ただならぬ視線を感じたフェレロの問いかけに、ハナはあせって平静をつくろった。うん……何でもない……ハナはからっとした笑顔でフェレロに話しかけた。

「ねえ、もうすぐだね、建国祭」

「うん、また来たなあジャントウユの季節が……うー、なんかドキドキしてきた」

「もう受け付けした？」

「うん、前回もアレだったからまた下のクラスからになっちゃうけど……でも大丈夫！決勝への一枠、絶対勝ち上がって見せるよ。ハナちゃん」

「うん……あ、あれ？」

不意にハナが何かを認めたのか声をあげた。向き合ったフェレロ

のちょうど背中、ゆらめく湖面の彼方にひととき大きな水煙が立ち上り、それは信じられないような速さで湖を横切つてゆく。フェレロはハナの指差す先の銀色に輝く機体に振り向いて目を輝かせた。

「マツキナ…… あれは…… ライトニングだ！」

「ライトニング？」

双胴の先端に一基づつのチュルボを備えたりエラ翼士隊の制式マツキナ、ライトニングは軽やかに舞うF/Fとは対照的な、硬質な塊が突き進んで行くような力に満ちた滑走を見せる。フェレロは弾む声でハナに答えた。

「やっぱり速いなあ…… うん、あいつは決勝に出てくるリエラ代表のマツキナだよ。旋回半径は大きいけど、とにかく直線が速いんだ。未だ負けなし、ジャントウユじゃ最強の機体だろうね」

鏡のような水面を磨きこまれた胴体に反射させ、ライトニングはフェレロたちの前を旋回してゆく。後部のノズルから覗く機関の輝きはまぎれもなくソラウイの惶波のそれであり、ハナは複雑な心境で遠ざかってゆく白銀の機体を見送った。

「フェレロ、やっぱりアレって、ソラウイが自分の惶波を使って走ってるのかな？」

「うん、多分ね。ちっちゃなレネリイをトリガーにしてる僕らのマツキナとはもとのパワーが段違いさ」

「そっか…… それじゃ追いつかないわけよね……」

フェレロは口元に笑みを浮かべると、立ち上がって湖へ向けて指笛を吹きならした。

「ルウラ、そろそろ行くよッ」

「アイアイッ！」

ビルケウの豊潤な輝きをからだいっぱいに受けたルウラが元気な声をあげる。食事の習慣のない彼女らにとって惶を浴びるということとは何よりも嬉しく、また欠かせないものなのだ。空へ向けてのばした指に止まった眩しいレネリイを見上げて、フェレロは期待に胸をおどらせて言った。

「無理じゃないさ、僕らもソラウィと同じ惶力を使えば条件は同じになるからね。あとは技量と反射神経、そして、運……」

「そ、そっか、今のルウラなら……もしかしたら、ソラウィ並の惶力があるかもしれないね」

「うん、優勝できたら50000リレの賞金だよ！すごいよね！翼士隊にも推薦してもらえるし……」

「でもあんまり危ない事しちゃダメだよ。毎年何人も死んじゃってるんだから……」

信じてはいるんだけど、どうしても心配してしまうのはやっぱり好意があるからなのか、そんなハナの心配そうな表情にフェレロもちよつと真顔になった。

「うん……でも僕、ハナちゃん達に迷惑かけてばかりだから……だから何か、みんなの為にしてあげられる事があるのなら、危険でも全力で頑張るよ」

「フェレロ……」

建国祭の一大催事……ジャントウと呼ばれるマツキナの競技会は閉鎖された市街地が舞台となる。毎回建物への接触やマツキナ同士の激突で死傷者が絶えない荒々しさ……そんな野蛮な見せ物への参加だなんて、ハナは本当は諫めたくて仕方がない。けれど今のオードルの境遇を思うと、すこしでも糧が欲しいのもまた事実なのであった。貧しい村人たちのためにあえて危険な競技に出場してくれているフェレロの想いを否定する事が出来ない自分……ハナは腹立たしさをおぼえつつもそんな気持ちを振り払うように声を上げて、ルウラをつつき回して遊んでいるフェレロをうながした。

「フェレロ、暗くなる前にチェカに着かないと。ガナッシさんここいくんでしょ？」

「あ、うん、そうだね……ルウラ、もう行ける？」

「アイ！」

チュルボにもぐり込んだルウラを確認したフェレロはシンダーを閉じた。機関が始動し、過剰な惶力をむりやり押さえこんでいる

かのように小刻みに振動している機体へ飛び乗ったフェレロは手綱を握ると伝声管に声をかけた。

「ルウラ、ぶつ飛ばしちゃダメだよ！」

「ううー……アイ」

「フェレロ、林の中抜けていこう。近いし、ソラウイに見つからなくてすむから」

「わかった。ハナちゃん、指示お願い！ルウラ、半速、0高度」

F/Fはなるべく光粒をまき散らさないように静かに浮上するとチエカへと進路を取った。開けた広葉樹の林の中の小径、ハナは遠ざかってゆくビルケウの輝きを見つめながら小さな声でつぶやいた。涙が一粒、風に舞って消えていった。

「今の……今のままがいちばんいいんだよね……ね、フェレロ……」

郊外にいくつも設けられた駐機場。新地漸の多くの都市において、街区では基本的にマツキナの通行が禁止されているため、訪れた者はここに機体を置いて居住区へと向かう。縦列の端にF/Fを降ろしたフェレロは、目の前の多種多様なマツキナが並ぶ光景にピュツと口笛を吹いた。いろんな工廠のマツキナの品定め、チエカに来たときのフェレロの楽しみのひとつだ。

「はあ、このテールピース、ピッチ制御も兼ねてるんだ……カッチリつくってある、頑丈そうだね」

「うーん、ハナにはどれも同じに見えるなあ……」

「すごい、これ水冷式だよ！翼に冷却器を埋め込んで……よくこんな事考えつくなあ！」

「それより早く街へ行こうよお、ハナ、おなかすいちゃった」

促すハナの声に、フェレロはシリンダーの中のルウラの頭を指でなでるとすまなそうに言った。

「ちよつと行ってくるね。ルウラも連れて行きたいけど今じゃ君は希少な幻のレネリイになっちゃったから……お金目当ての人たちに

狙われるかもしれないし、いろいろ危ないからここで待ってて」

「アイ！」

「すぐ戻ってくるよ、あ、そうだ、ぬいぐるみ買って来てあげるね」

「アイアイ！」

「じゃ！」

外からロックをかけとけば大丈夫だろう。フェレロは機関室の力バーを閉じると緊急解放弁の圧を抜いた。

「うつゝわくわく、ねえフェレロ、ちよつと街に寄っていきようよ」

「え？さつき早くガナッシさんところ行かなきゃって言ってなかった？」

「そんなこと言ったかな。わすれたな。あつホラ、ゲートだよ」

駐機場の角の門をくぐると目の前に広がる街区、いろんな化学薬品の臭いにつつまれた工場が立ち並びいささか雑然とした町並みは田舎暮らしのフェレロ達にとって目新しい物ばかりでいつも楽しみだ。ここで発見された地下惶泉を動力にする工場群、そしてそこに暮らす人達の住居が集まって出来た街チエカは、いまやリエラの重要な工業の中心地として位置づけられており、よってソラウィによる監視も厳しく、工場で働く人々は常に彼らの視線を気にしながらノルマを積み上げているのであった。とはいえ人々の生活水準は辺境のオーデルとはちがって豊かで、ハナは店頭に並べられた装飾品や雑貨、そしてあまゝいジェラートに目を輝かせた。

「ねえねえフェレロ、ジェラート買お」

「えゝ僕はいいよ、あんな甘い物がこの世にあるなんて信じられない」

「ふーん、おいしいのに、ハナ、買ってこよつと」

バザールは夕方の買い出しに訪れた人達で賑わっていて、フェレロはその光景を見ながらひとときの平穏にひたっていた。行き交うヒュピアの人々、要所要所に立つ完全装備の翼士隊の姿がものものしいけれど、それでも夕餉を求める労働者と商人との威勢の良い掛け合いは耳に快く、フェレロはその心地よい雑踏に誘われるよう

に路地へと入っていった。軒の上の商品は頭上に覆いかぶさるよう  
に高く積まれ、店主はだれかれ問わず声をかけてくる。そんなバラ  
ツクの立ち並ぶ小径でフェレロは、派手な装いのレネリイが呼び込  
みをしているちよつとあやしげな店舗の前へとやってきた。一面に  
つり下げられた小さな服や靴、髪飾りなど、看板には「妖精良品」  
と書いてある。フェレロはぎこちなく踊っている店頭のレネリイに  
声をかけた。

「あの、レネリイ用のおもちゃ、あるかな？」

「ハ、ハイ！」

売り物の装飾をじやらじやらつけられたレネリイはぺこりとおじ  
ぎをすると陳列棚の裏へと飛んでいき、程なく奥から初老の女性が  
小箱を持つて姿を現した。

「いらつしゃい、ほら……このへんはいかがかの……？」

「元気そうだね、エレノアさん」

「……フェレロぼっちゃん？」

「ぼっちゃんはやめてよ、エレノアさん。僕はもう子供じゃないよ」  
「ややや、またおおきくなつてえ……ささ、中へお入り」

はじめてチエカに来たときに何もわからなくて、その時に何かと  
助けてくれたエレノアをフェレロは実の祖母のように慕っていた。  
彼女と話するとき、それからたまに作ってくれるお菓子やお茶を頂く  
とき、フェレロはえも言われぬ安らぎに満たされるのであった。案  
内されたフェレロにエレノアは、今仕上がったばかりのフクロウの  
ぬいぐるみを手渡した。

「ルウラは元気かい？」

「うん、もう元気すぎちゃって……あれ？なんでフクロウなの？」  
「むかしの王家の象徴さ。お前達を守ってくれるだろうよ」

「うーん、ルウラよろこぶかなあ……まあいいや、ありがとエレノ  
アさん。いくら？……」

フェレロの差し出す銀貨をエレノアは丁重に断った。

「いやいや、そんな、ぼっちゃんからお金を頂くなんて……」

「そう言わないでとつといてよ。大丈夫、僕が稼いだ銀貨だから」  
「まあまあ……」

ぎこちないながら大人っぽく見せようとする振るまいが頼もしく見えるのか、エレノアはそんなフェレロにこやかに応えながらもやはり銀貨を受取るうとはしなかった。格好つかなくてちよつと困ったフェレロ、その時表通りで突然群集のどよめきが起こった。ハナが血相を変えて飛び込んでくる。

「はあ、はあ、やっと見つけた……フェレロ！F／Fが、私達のマツキナが翼士隊に追われてるよッ！」  
「何だつて？」

あわてて店の外へ飛び出したフェレロの目の前をF／Fの丸い主翼が切り裂くような高音と共に駆け抜けた。錯乱しているのか出力の調整も荒っぽくて、機体強度ギリギリの機動をしている。フェレロは雑踏の中をかきわけ十字路へと行くと周囲を見渡した。

「翼端渦が……どこか……どこか高い所は……そうだ、ルシエナの魂！」

「フェレロ、どうするの……キャッ！」

耳を劈く爆音と噴圧、2機のライトニングが惶の長い尾を引いて二人のすぐ上を通過した。緊密な戦闘隊形のまま急旋回しF／Fを追っている。ハナは駆け出したフェレロの背中に叫んだ。

「フェレロ！どうしよう！ルウラ落されちゃうよ！」

「F／Fに飛びうつる！それしかない」

「ハア？」

訳がわかんないままその後を追いかけるハナ、フェレロは空を見上げる人々にぶつかりながら広場の中央に建つ立派な鐘楼のファサードにたどり着くと、頂上まで続く長い螺旋階段を駆け上がりはじめた。

「フェレロ！待ってよ！」

チェカの街区にある建物に囲まれた広大なテロル広場の中央に聳える大掛かりな鐘楼、街の象徴とも言えるこの塔の頂きには「ルシ



エナの魂」とよばれる鐘が眩しい金色の光を放っている。およその新地漸では精錬できない不可解な材質で出来ているその音色は天にも届くかのように澄みわたり、鐘架のアーチからは遠く雪を頂くヴェネトの氷河まで見渡す事ができる。突然の空中戦に眺望を楽しんでいた人々は雲の尾を引くマツキナに釘付けとなった。

「おお！翼士隊が追いつけないぞ！すごい機体だな」

「何だ？ジャントウユの練習でもやってんのか？」

「連係をとって来やがった……危ない！そこで切り返せ！」

階上から聞こえてくるやんやの歓声にフェレロは気が気じゃない。息を切らせてやつのことで「ルシエナの魂」まで昇りつめたとき、数条の惶弾が鐘楼のすぐ横をかすめた。熱波が一瞬大気に陽炎を生みだす。

「うお！撃ちやがった！」

「くっそー！丸腰の民間機に何てことしやがる、この腰抜け共が！」

「あちゃゝ発砲許可出たのね。ヤバいなあ」

警察機関でもある翼士隊の機体には惶波を収束して打ち出す「惶弾」の発射装置が備わっており、ライトニング級はそれを4門装備して絶大な火力を持っている。ただ当然消費する惶力も大きく、機動飛行しつつ全門発射できるソラウィの数はそれほど多くはない。惶弾はF/Fのはるか後方を流れ去った。フェレロはアーチから身を乗り出して指笛を吹いた。

「ルウラ！こつちだ！全力減速3秒！後はまかせて！」

フェレロの耳にルウラの声が聞こえた気がした。

居住区と川一本隔ててひしめき合う大小さまざまな工場群。その中でも街に近い第3工業区画、いわゆる惶の埋蔵量の少ないやせた一帯には大量の動力を必要としない手工業や修理屋といった零細工廠が数多く存在している。その一角にほとんど残骸同然のマツキナや動力機器がうず高く積み上げてある広場があった。時折原因不明

の爆発や積み上げた残骸の崩落で周囲を苦笑いさせているこの主人は、新しく引つ張って来た墜落したライトニングの動力部から顔を出して額の汗を拭った。

「最近機関のバイパス比が高くなってるな……どう見る？まさか、ソラウイの惶力が低下しているとでも？」

「おいガナツシ！街区でマツキナが追いかけてこやってるぜ！ほらあれ」

「追いかけてこ？」

薄汚れた作業着の襟元をこつ指で大きく開いたガナツシは、隣の刀屋の頭領の指差す先に目をやった。翼上面から気流を剥離させて旋回する丸翼のマツキナを、2機のライトニングが追撃している状況を見て取ったガナツシは大慌てでバラック建ての作業所へ戻り、空中線受信機のダイヤルをせわしく回しはじめた。

「ありやF/Fだ……あいつ、なにやらかしたんだ？」

石英管の振幅が大きくなる所をひとつづつ……ええいまどろっこしい！ガナツシは見当をつけて3つのダイヤルを任意に合わせた。

突然ホルンから飛び出す騒ぎ立てる何者かの声、ガナツシは雑音まじりのその交信を注意深く聞いた。

「繰り返す……追跡中のマツキナは無人……当該機に搭乗者は確認できず……」

「見越し角がとれない！……何て機動性なんだ……」

ガナツシは再び外へ出ると、長く尾を引く白い航跡に目をこらした。

「どうなってるんだ……フェレロ……」

未だに占位できないでいるライトニング小隊に2機の増援が加わった。前後に展開し挟撃の隊形を取る。F/Fのトリガー、ルウラはフェレロの指笛を確かに聞いてその場所を特定し、最速の旋回率を維持して鐘楼へと向かっていた。減速してホバーリング、乗り移るまでの数秒……その間に撃ち抜かれれば一巻の終わりだ。フェレロは目視で迫ってくるF/Fの距離と速度を頭の中で減算していっ

た。

「なんだ？あのマツキナ、こっち向かってくるぞ！」

「おいこら！おれたちを巻き込むな……う、撃つぞ！」

「逃げるッ！」

まっすぐ向かってくるF/Fとライトニングに、見物していた人々は我先にと螺旋階段に殺到した。フェレロはアーチの上に立ち、抜けてゆく風に吹かれながら呼吸を整えた。

「ルウラ！最大減速3秒！ピッチ60！」

大きく機首上げの体勢をとったF/Fが急激に減速しながらフェレロのいるアーチに迫る。風圧ときらめく惶の光粒、ルウラ渾身の逆噴射が鐘架をゆさぶり、フェレロは息も出来ない程の風圧に押し戻されながらも何とかその翼の側までやってきた。

「よくやったね！今からそっちへ行くよ」

「フェレロ！はやく！ライトニングがくる！」

「はあああ！」

フェレロはアーチから翼へ向かって跳躍した。着地！そのまま翼面を勢いを付けて走り抜けようとしたが翼面が滑る！反射的にのばした手に絡み付く手綱、よしッ！しかし次の瞬間正確に放たれた惶弾がフェレロの足下の翼を撃ち抜いた。衝撃で機体が大きく傾く。

「当たった？お、落ちる！」

平衡を失い木の葉のように降下してゆくF/F、宙づりになってしまったフェレロは手綱を握りしめ落下するまいともがいた。

「フェレロ！」

下で見守るハナは背筋の凍りそうな光景に大声で叫んだ。主桁を砕かれたF/Fの左翼は完全に折れ曲がって上を向いている。フェレロは渾身の力で何とか手綱を昇って操縦台へとたどり着くと伝声管に叫んだ。

「ルウラ、下手に飛ぶと狙い撃ちだからこのまま落っこちるんだ！直前でホバーリングに入れるから準備してて！」

「アイ」

落下してゆくF/Fのすぐ上を4機のライトニングが交差した。さすがに対面に僚機がいては発砲できないのか、増援で加わった2機は急上昇して速度を殺し、ゆるくターンして戻ってくる。先程の遠距離射撃といいかなりの技量なのだろう。フェレロはその自在な機動に軽い戦慄を感じた。

「やるなあ……いいかい、ルウラ、ホバーリング……」  
「……ウウウウ」

「いけ！」  
「アイ！」

絶妙のタイミング、F/Fは地上スレスレで落下を止めるとその場にぴたりと浮揚し、やがて静かに着地した。F/Fを見守っていた人々から安堵の声がもれる。それはやがて歓声の輪となって広がり、フェレロは手を叩きながら自分へ向けて集まってくる人並みを見てちよつと引いた。

「え？何なの？ちよちよちよつと待ってってくれて……」  
「フェレロ！」

ハナが一目散に走りよってきて抱きついた。人垣は見る間にF/Fのまわりを覆いつくし、ヒュピアの人々はいけ好かない翼士隊に一泡吹かせた華奢なマツキナとその搭乗員に喝采を浴びせた。

「凄かったぞ！久々に胸がすーっとしたわ！」

「いい腕だな！こんどのジャントウユ、お前に賭けるぜ。ボウズ」

「フェレロ！もう！いつもこんなこわいことして……ぐすん……」

ハナはもう涙でぐしゃぐしゃ、そんな二人の姿を広場の人々は微笑ましく見守るのだった。暮れゆく空がひととき茜色に光を投げかけ、街に鋭角的な陰影を刻んでいく和やかなひととき、しかし、まるでその平和を踏みにじるかのように、燃えるような夕景の朱を身に纏った悪魔のようなライトニング編隊が強烈な惶の噴流を地表に叩き付けながら次々と降下してきた。突然の招かれざる客たちにあわてて散り散りになる人々、4機のライトニングは摺座したF/Fの前に整然と並んで着陸し、その砲口を翼の折れたマツキナにぴた

りと合わせた。とりあえず無抵抗の意志を見せるフェレロとハナの前に、金色の彫金でひときわらびやかに装飾された甲冑に身を包んだソラウイが歩み寄ってきた。

「うわ……何かえらい人みたい……フェレロ、どうしよう……」

「……あの目の色……」

冑の発する硬質な擦過音が一歩ずつ近づいてきて、二人の前で止った。兜の風防を解放したそのソラウイの男は、惶をたぎらせた威圧的な眼差しでフェレロをにらみつけ詰問した。

「お前、力を持っているようだな……見せてみる」

## 第4話「ハヴォック」

突き出した煙突からもうもうと黒煙を吹きあげながら、大型の荷台を牽引したいかにも鈍重そうな装輪式のマツキナが居住区へと向かう橋の上を進んでゆく。両手に左右各々のクラッチのレバーを握りしめたガナツシは、回転数の差から生じる偏向で脱輪しそうになるのを小刻みな断続でしのぎながら何とか対岸へと向かっていた。

地中を貫く惶の幹に曝されて生成された「惶石」そのエネルギーは新地漸の産業に大きな変化をもたらしはじめてはいたが、稼働させる機関や燃料の重量の大きさをゆえ、マツキナの原動機はまだ妖精機関が主流であった。その究極に到達したと思われるライトニング級、それと互角以上の機動性を見せつけたF/Fにリエラが黙っている訳がない。ガナツシはとにかく翼士隊より先にフェレロたちを確保しようと最大にまで蒸気圧を上げた。

「あの飛び……フェレロのやつ、とうとう見つけたのかもしれない。ならなおさら、ハースの奴に渡すわけにはいかねえぜ！おらおら！ボケツとしてると轢いちまうぞ！」

ガナツシは蒸気をまき散らしながら、テロル広場への街路を突き進んでいった。

3機のライトニングを背後に従え、不時着したF/Fの前へ歩み寄って来た若きソラウイの将校は自分より少し小柄な、しかしほぼ同年代に見えるフェレロを見て蔑むように笑った。

「私はカロン、大リエラ翼士隊の指揮をしている者だ。操縦者、名を何という」

「僕はフェレロ、びつくりしたよ。あの体勢からは撃ってこれないと思ったのに」

「フェ、フェレロ！そんな言い方なれなれしいよ……す、すみま

せん、あの、その……」

「フッ」

極度のソラウイ兵恐怖症のハナはフェレロの、まるで友人とでも話すかのようなその応対に気が気じゃない。しかしカロンは気にする素振りすら見せずに、二人の横を素通りして翼の折れまがったF/Fの側へと歩いていった。思わず振り向いたフェレロに随伴している翼士隊の兵士が剣を抜いて喚起する。

「動くな！長生きしたかったらな、ハハハア！」

「ちっ」

「煩いぞ、任務は寡黙に遂行しろ」

仰々しい声で脅しをかける部下をカロンは禁めた。そしてF/Fの流麗なフォルムと破口からのぞく翼の構造を一通り確認した後、全く臆することなく自分を見つめてくるフェレロに向かって言った。「条例3項の2は知ってるな？街区におけるマツキナの飛行禁止を定めた規則だ。これにより当方には検閲する権利が発生した。貴様の機体、詳しく調べさせてもらおう」

「べ……別にいいけど」

「フェ、フェレロ？あの中には……」

身を乗り出すハナをフェレロは軽く制止した。カロンは操縦台に昇ると、慣れた手つきで機関部パネル解放用の把手を引き出して左へと回した。導管が切り替わり、かすかに空気が満たされる音がしたが圧が足りないのか、嵌合を解除することは出来なかった。カロンは表情を険しくするとフェレロに問いただした。

「解放用の把手はここだけか？」

「さっきの一発で高压タンクが破れちゃったみたい、圧搾空気でもないといけないよ」

「そうか……仕方ない。手荒なことはしたくはないが」

そういうとカロンは操縦台から降り、右手首の手甲から肘へと繋がっている導管用の索の接続を切り離れた。瞳がわずかに揺らめき、F/Fへとかざした右手が眩い輝きを放ちはじめ。それを見たハ

ナは息を飲み蒼白となった。修羅の光景が脳裏に甦る。

「あれは……みんなを……みんなを焼きつくした光！フェレロ、あいつ、F/Fをッ！」

「なにいッ？」

いきり立つフェレロに今一度突き付けられる翼士隊の剣、カロンは冷徹な視線をフェレロに投げかけた。

「このマツキナ、実に速い機体だ。機関とのバランスも極めて高い次元にある……しかし、我が皇軍以外にこのような機体が存在してはならんのだ。協力してもらえないと言うのであれば、消し去るのみだ」

F/Fへと伸ばした右手の光球が機体の薄いパネルを波打たせはじめた。発火すればたやすく延焼するだろう。そうなれば妖精機関内のトリガーは空気を失い窒息することになる。フェレロは叫んだ。

「や……やめろッ！」

「見せてもらえるのだな」

「……くッ……わ……わかつ……」

フェレロがカロンの要求を受け入れようとしたその時、不意に背後を固めているライトニング部隊が色めき立った。

「お前ッ！止まらんか！くそっ、緊急回頭！」

「何事だ！」

「不審なマツキナが……急げ、砲門をあいつへ向ける！」

フェレロを拘束していた翼士兵が各々の搭乗機へと走る、その向こうに立ち上る黒々とした煙……それは高々と空中へと噴き上がりながらフェレロ達のいる鐘楼へと近づいて来ていた。回頭が間に合わずやむなく空中へ退避するライトニング小隊、その真下をパージ孔から大量の水蒸気を噴き出して減速を試みるマツキナが通り過ぎた。

「くそっ！何も見えない！」

「下手に動くな！衝突するぞ……うわっ！」

一面に立ちこめる熱い揺らぎ、飽和した白煙は外気に触れ凝縮し



建物で囲まれたテロル広場をじっとりとした霧で満たしてゆく。早計にもマツキナで浮上してしまった翼士隊は視界を確保する為高度を取るしかなく、カロンは白いミストで見えない上空に部下達の安否を把握出来ず、その不甲斐なさに苛立ちを覚えた。

「失策をッ！この状況でマツキナを使うなど愚の骨頂……な、何だ？」

金属の軋む音と汽笛、振り向いたカロンの目前にはいつの間にか巨大な機械らしきものの影が近づいてきていた。立ち上る白い陽炎の中、共にその無骨なシルエットが次第に鮮明になってゆくのを守るフェレロの耳に、聞き覚えのある荒々しい声がひびいてきた。

「フェレロ！大丈夫か？」

「！……ガナツシさん？」

未だに残留した蒸気をチェンバーから小刻みに噴き出している巨大なマツキナの運転台から、梯子をつたって大柄な男が降り立った。その姿を認めたカロンは惶波を撃つべく構えていた右手をぐっと握りしめ、大きく息を吐いた。

「ガナツシ、また貴様の仕業か？」

「ハッハハ！すまんすまん、まだまだ制御に問題があるようじゃな……さてと」

やや呆れた顔のカロンにぶつきらばうに話すガナツシの姿を見て、フェレロとハナはほっと胸をなで下ろした。どうやら面識があるようだ。フェレロは心の中で妖精機関内のルウラに話しかけた。

「ルウラ、だいじょぶ？」

「アイ」

「もちよつとおとなしくしててね。上手くいきそうだから」

「アイアイ」

装具を元通りに装着しなおしたカロンは、F/Fに勝手に近づいて各所の状況を確認しはじめたガナツシに不機嫌そうに声をあげた。

「あの少年達はお前の知り合いか？」

「あれ？紹介してなかったかね、彼はフェレロ、ウチのテストパイ

ロットだ」

「しかし報告ではあのマツキナは無人で飛行していたとある。どういふことなんだ」

ガナツシはニヤリと笑うと、運転台に飛び乗ってカロンを見下す目線に立った。

「は、言いたくはないけど仕方ねえ、こいつにはマツキナの自律航行装置が積んであるのさ。つまり機体が自分で危険を判断して飛んでくれるわけ、実用化できればたとえパイロットがミスしても墜ちはしねえ。ほれ、あんな事にならなくて済むって事だ」

ガナツシは顎でテロル広場の一角を示した。そこにはさっきまで後衛を固めていたライトニング小隊……カロン機を除く空中回避した3機が見るも無惨な姿で墜落していた。おそらく視界を奪われ接触、墜落したのだろう。その光景を見たカロンは思わず舌打ちをした。ガナツシは尚もうそぶく。

「いや、まだ飛ばすつもりはなかったんだが静電気が何かで勝手に起動しちまってな……街区にテスパイを待機させててよかったよ。へっへへ、あいつは凄腕だからな。うまくやりやがった」

「その自律航行装置とやらは何時完成するのだ？」

苛立ちを隠せないカロンの言葉にガナツシの目が光った。

「もう一息ってとこなんですがね、何せ費用がかさんじまって……あと1000000リレくらいあればいいもんができるんですけどねえ」

「1000000だと？ふざけるな！それだけあればライトニングが一機調達出来るのだぞ」

「配備したって戦力にならなきゃ意味ねーでしょうが。ああ、あちらの3機、ご不要でしたら引き取りますぞ、旦那」

ニヤついて足下を見るガナツシ、しかし彼のその言葉の裏に潜む翼士隊が直面している問題は確かにカロンにとっても急務なのであった。

「口の減らない奴だ……わかった、稟議は通す、一日も早く完成さ

せろ」

「へいへい、おいフェレロ、F/Fの回収手伝ってくれ。クレーンを使う」

「うん……よかった」

テキパキとF/Fを荷台へと乗せる準備を進めるガナツシ達を横目に、カロンは早足で広場の隅へと歩いて言った。もともとある程度の飛行能力のあるソラウイの事、隊員には大した怪我はないのだが、さつきまで磨き上げられた機体で周囲を威圧していたライトニングはどれも全損に近い状態で、カロンは整列している部下達に厳しい口調で指示を出した。

「とんだ醜態を曝してくれたものだ。貴様ら！己の研鑽が足りないからすぐ機械に頼ろうとする。いいか、戻ったらみっちり扱いてやるから覚悟しとけ。それからハースを呼べ、機体を回収させる」

「はッ！」

敬礼をする隊員達を冷ややかに流し見ながらカロンは自機の所へと歩いていき、機関を始動する準備を始めた。操縦席の遮風板を通して、釣り上げた機体を誘導しているフェレロの姿を見つめていたカロンは、被弾からのスムーズな立て直しを見せたその技量に不思議な昂りを覚えていた。

「フフ、決着はジャントウユでつけるっていうのはどうだい？フェレロ君」

昼夜という隔たりのない、常にヴーの弱々しい光に淡く照らされている新地漸においては、ヒュピアの人々は噴出する惶が豊富で明光な地域「ヒル」で働き、郊外の痩せて薄暗い土地「ヤナ」に寝食の場を置いている。そんなヤナの集落の中にあるガナツシの工廠、普段は小さなランプがぼんやりと一隅を照らしているだけのガレージが今日は煌々とした明かりを灯していた。翼の修復を終え、機関の検査のために圧縮部を取り外したガナツシはそのあまりの摩滅の

様に目を丸くした。

「こいつはヒデえ……タービンの羽根がほとんど溶けちまつてるぜ。フェレロ、そのチビ、とんでもねえ奴だな」

「ルウラだよ、ふふっ、寝てるときも光ったままだから眩しいね」

「ああ……こんだけ惶があふれ出てりや昼寝したまま飛んじまうのも無理ねえか……なるほどこの子にはコンプレッサなんて邪魔なだけみたいだ。途中の抵抗を極限まで減らしてやって、持てる惶波を効率良く推力に変えるやり方のほうが資質を生かせるかもしれない」

「じゃあもつと速く……ライトニングよりも速く飛べるかな？」

フェレロは目を輝かせてガナツシに問う。

「正直こんな凄いレネリイ扱った事ねえからなんとも言えねえが……そいつが気持ちよく力を出せるような機関に調整する事は可能だ。問題はその上限が未知数という事だな」

「うん……まだまだ余裕ありそうなんだ。ルウラ」

「頑丈に作れば重くなる、だがそれではハースのやり方と同じだ。わしもライトニングは好かんのでな、あんな風にはしたくねえ。その辺の線引きをどうするか……」

「おいっちゃん、一人暮らしのわりにはイイお茶飲んでるね！はい、カップ出して」

世話焼きのハナが大きなポットを持ってやってきた。もともと父親のゴランと親友同士だったガナツシには幼い頃から可愛がられていたこともあって、ハナはこのガレージに郷愁にも似た居心地の良さを感じていた。壁一面に張り付けられた数えきれない程のマツキナの設計図……旧態然とした王国時代の機体から意欲的な最新作フライングフェザーまで、もうそれ自体がマツキナの発展史と言える程の膨大な情報、それを前にがやがや議論を交わすハンター達の記憶はハナの男性に対する原風景そのものであった。ガナツシは寝板から起き上がると作業台へとやってきて、廃材で作った操縦席風の椅子にとっかと腰を降ろした。

「茶好きに独身もへったくれもあるかい！それはそうとハナちゃん、

しばらく見ねえウチにずいぶん大きくなったじゃねえか。こりやめえ、男が放つちやおかねえのと違うか？なあ、フェレロ」

「えーハナちゃんが？ハハハハ！心配ないよ。下手に近づいたらぶっ飛ばされるから」

「フェレロ！もう、お茶あげないッ」

またまたふくれっ面のハナ、確かに男所帯で暮らしているせいか言動や仕草に女の子っぽいところが全く感じられないのだが、それでも最近の彼女の成長ぶりはいやでも女性を意識させられるものでフェレロはそんなハナにいささか戸惑っているのであった。

「でもよかった、おいっちゃんがあのソラウイのえらそな人と知り合いでさ。今日はさすがにちよっとヤバかったから」

「カロンか……奴も不憫な男よ。心配するな、あいつは俺らには手は下さんよ」

「自律航行装置か……確かにモノは言いようだね。間違っちゃいないもん」

フェレロはガナツシの咄嗟にしては上出来な言い訳を思い出してクスツと笑った。

「まあな……そついや最近用廃のライトニングを調べてて気がついたんだが、オーギュメンタの過給がずいぶん高圧寄りになってきているんだ」

「トリガーに苦痛を与えて出力を上げるっていうアレだね」

「うむ、妖精機関を2基載せているライトニングは、一部のソラウイの機体を除いて補助用にレネリイを装備しているんだが、どうもそれに依存する割合が高くなってきているみたいだね」

「それってどういうことなの？」

よく意味が分かってないハナも言葉を挟んでくる。彼女にとってはマツキナの話をしているときのフェレロの表情が好きなのだ。もっとも今はガナツシを独占されてるのが気に入らないだけなのだけだ。

「例えばカロン、あいつはライトニングの妖精機関2基と4門の惶

弾発射機をフル稼働させられるだけの惶力を持っている。だがそんなやつは翼士隊には数えるほどしかいねえ。ほとんどのソラウイはレネリイの力を借りてようやく飛んでいるに過ぎないのさ」

「確かに物足りないと思ったよ、最初の2機は。ルウラだけでも楽々逃げれてたし」

「ソラウイの力は確実に衰えつつある、これがわしの得た結論じゃ。現に最近ハネロ探しに躍起になっているような動きも伺える。ハネロの奴も何とかラーマに侵入しようと画策しているようだ」

フェレロは自分でポットからお茶を注いで飲み干した。強い苦みと覚醒作用、長距離を飛ぶ事の多いハンター達が好んで携行する希少な銘柄だ。ガナツシが整備料金のカタにでもせしめたものだろう。フェレロは心地よい高揚感に包まれた。

「ハネロはたくさんいたよ、でもあの子達は普通のレネリイとは全然違うんだ、いくらソラウイでもあれを捕獲するのは……とてもじゃないけど追いつかないよ、無理したらずっこけちゃうしね、ハナちゃん」

「ベー、どうせどんくさいですよーだ」

「おいおいここで喧嘩は止めにしようぜお二人さん。ところでフェレロ、実際ラーマはどんな所だったんだ？」

「うん……」

フェレロは話したそうとしてチラツとハナの顔を見た。ガナツシの隣で一緒にお茶を飲んでいるハナはその視線に気がつくとしかめっ面で舌を出してきた。ああ……ひどい顔……普通にしとけば可愛いのに……でもそのカラツとした反応のおかげで、フェレロは自分の琴線にふれた出来事を話す決心がついた。

「女の子のソラウイがいたんだ……僕と同じくらいの」

「あんな地の底の暗闇にか？信じられん。連中は豊富な惶の近くでないと生きていられんというのに」

作業台の上で寝息を立てているルウラをはさんで向かい合っているガナツシが身を乗り出した。

「大きな惶湖があつたんだ。僕らのF／Fはなんとかその畔に降りられたけど、降下の制動でルウラが無理しちゃって……」

「ラーマへ挑んだ者の宿命ってやつだな……ん？その時のトリガーはルウラだったのか？」

「アイ？」

名前を呼ばれたと思ったのか、ルウラが寝ぼけた顔で顔をあげた。  
「あ、ごめんごめん、用はないんだ。おやすみルウラ」

「ムニャ〜」

再び丸くなるルウラ。その小さな身体を包み込む光はとても優しく、フェレロはそこにテレシアの面影を思い出しながら言葉を続けた。

「火傷が酷くて……もう駄目かと思った。でも、そのソラウィがルウラを助けてくれたんだ」

「レネリイとソラウィはもともと同じ種族だったと聞いた事はあるが……しかし何でそんな隔絶された闇の地にいるんじゃない？」

「わからない……それどころじゃなかったから……でもテレシアは、他のソラウィとはどこか違うような感じなんだ。なんて言うか、違う種族って気がしなくて……」

「……むぐ？テレシア？おい、今、テレシアと言った？ソ……ソラウィが名乗ったのか……げほごほ」

ガナツシはその名前を聞いて思わず声を上げ、飲みかけたお茶をのどに詰まらせて咽せかえった。ハナがあわてて背中をどんとたたく。

「おいっちゃんだいじょぶ？」

「はあ、はあ……で、その……その、テレシアと言うソラウィと何か話したのか？」

「うん……よくわからないけど、会った事もないのにいきなり名前を呼ばれて……」

「な、なんじゃとお？」

「おいっちゃん！」

立ち上がってフェレロに迫るガナツシの肘をつかんだハナは、興奮気味の彼の顔をにらみつけた。引っ張られて振り向いて、自分を見つめるハナの瞳の奥に込められた想いを感じ取ったガナツシは、ふうと深い息を吐くと再び座り込んだ。

「……そうか……フェレロ、騒ぎが首府の連中に知られる前にここを離れた方がいい。機体は整備しとくから明日早く発て」

「え？う……うん、助かるよ。早くハナちゃん送り返さないとドヤされそうだしね」

「そうと決まれば作業じゃ！お前達はバラックの方で休んでくれ。日が変わるまでには仕上げとくから」

「うん、おいつちゃんお願いね、じゃあおやすみ！ほら、フェレロ」  
「ハ、ハナちゃん？」

何かに急かされるように、ハナはフェレロを引っ張ってそそくさとガレージのドアを開けた。

「どうしたんだよ急に、僕も直すの手伝わないと……」

「フェレロはまた飛ばなきゃいけないから早く休むの！ほら、こつち！」

「大丈夫だって……離せよ……わわ……」

ハナに引きずられるようにフェレロはガナツシのガレージを後にした。日も更けて静かな町外れ、バラックへとたどる道すがら見上げた空には、色鮮やかな揺らめきを見せるヴーの流れが幾筋も地平へと向かって飛翔しているのが見える。フェレロは思わず握ったハナの手を引き寄せて足を止めた。

「待って、ほら見て、ハナちゃん、すごいね……こんなにたくさん  
の残照ってひさしぶりに見たよ」

「え？うわ……きれいだね……オーデルは空が明るいからこんな  
には見えないよね」

「うん……何だかこのまま吸い込まれそうだ」

二人はしばしその場に佇んで、全天に広がる光の饗宴に見とれた。  
「……明日はオーデルに帰れるね、フェレロ」



「うん、ゴランさん、心配してるだろうなあ」

瞳に鮮やかな色彩を映すフェレロの横顔を見つめてハナは軽くなずいた。いつもと変わらぬ安らいだひととき、けれど彼女は、この平穏な時間がもう長くはない事を感じはじめていたのだった。

「ルウラ、コンタクト」

「アイ」

時を上げるルシエナの魂の音色に彩られる清々しい空気の中、駐機場に運ばれたF/Fの新しい妖精機関にフェレロの指示が飛ぶ。計器盤に灯る虹色の惶波、乾いた回転音を聞きながら絞り弁をゆつくりと開き出力を上げてゆく。それまでの極端な力場の形成はすっかり影を潜め、自然吸引ならではの素直な反応を示す機関の反応にフェレロは少し拍子抜けした。それでもその静かな稼働音とは裏腹に、F/Fはすでに地面からわずかに浮上してぴたりと安定しているのであった。ハナが手すりを越えてちよつと乱暴に飛び乗っても微動だにしないホバーリングの様は、惶波が十分なゆとりを持って供給されている事を意味する。フェレロはF/Fの余剰出力を試してみた。

「ルウラ、直上昇！」

「アイ！」

「うひゃ」

ハナの驚く声はあつという間に上空へと消えていった。よどみなく滑らかに、しかも強烈に発揮される推力はF/Fの繊細な空力特性とぴつたり合致して、まるで重力が存在しないかのような変幻自在の機動を可能にしていた。フェレロは秀逸な操縦性に感嘆しつつ、地上で見送るガナッシに向けて機首を垂直に上げたまま翼を振った。「ありがとうガナッシさん！すごくいい感じだよ、大事にするね！」  
「フェフェフェレロ、落っこっちゃうよーッ」

「ハナちゃん、帰ろう、オーデルへ！」

駐機場の上空を一回りしたあと、フェレロ達を乗せたF/Fはフェルビナク県を後にした。みるみる小さくなってゆく機影、ガナツシは確かな手応えを感じながら、消えてゆく惶波を見つめ続けた。

「あいつめ、早々とエンベロープを把握しやがって……さすがフェルデイの子っていうわけだ。ふふ、その意味を知る日はやがて来る。どうやらお前は宿星に出会ってしまったみたいだから……」

佇むガナツシの頭上に残る一条の航跡、遠く地平に向けて伸びてゆく輝きは天空のヴーの渦を鮮やかに切り裂いてゆく。それはまるで、大いなる意志によってこの世界へ打ち込まれた聖槍のようであった。

## 第5話「ヴェルクトゥ」

薄闇に沈む蒼いゆらぎ、時の流れに取り残されたかのような地底の湖畔で、テレシアはいつになく興味深げに新地漸歸りのネーロの話に耳を傾けていた。外の世界で様々な見聞を得てくる彼女ら特別なレネリイ達の存在はともすれば寂しさに押しつぶされそうになるテレシアにとって何よりの慰み、そして、初めて無事にラーマへとたどり着いたハンター、フェレロとの突然の出会い、閉ざされそうになっていたテレシアの心に小さな光を灯していたのであった。

「そう、チエカの街でそんなことが……うん、私もそう思うの、忘れたことなんかない、あの優しい瞳……彼はフェレロ……フェレリオ・ミ・デイ・キャストレ……」

ちよつとはにかんだ横顔を見せるテレシアに、一緒に聞いていたネーロ達はいっせいに翔き冷やかしの声をあげる。輝く湖、泉の奥深くから湧き出てくる惶のきらめきに舞い飛ぶ彼女らの彩りが添えられた水面の華やかさは、ここが闇に閉ざされた朧の森だと言う事を忘れてしまう程に光を放ち、テレシアはその中に忘れ得ぬあの日……王宮での婚礼の日の光景を見い出すのだった。

「……ここに閉ざされて、もうどれほどの時が経ったのでしょうか、フェレロ、またあなたに逢えるなんて、テレシアは夢を見ているのでしょうか……生きてて……元気そうでよかった……あなたのコトネはまだ聞こえないけれど、私はそれだけで充分です。けど……けど本当は今すぐ会いたい……この暗い檻からあなたのもとへ羽ばたいてゆきたい……」

テレシアは膝に乗せた小さな子の髪を優しくといてあげながら寂し気につぶやいた。うつらうつらしていたネーロはそれを聞いてポウと光ってテレシアの方に振りむくと、何やら耳打ちをしてキラッと笑った。

「え？助けに来る？王子様だから？クスッ……そういえばむかし、

そんなお話、フェレロといっしょに読んだなあ……」

ネーロの無邪気な激励にテレシアは木々の梢の先、はるか頭上に丸くくり抜かれたヴーの空を見上げた。あの……あの先に行けばフェレロ達の所に行ける……けど……けど私は……惶の力を司る種族、故に新地漸において惶のない地域では急速に老化が進んでゆくソラウィという存在……テレシアは、自分ではどうする事も出来ない運命を嘆かずにはいられないのであった。

「どうして……ここで人知れず朽ちてゆく事に何の未練もなかったはず……けど……今はここから出たい……死んでしまいかもしれないけど……いえ、それはだめ、こわい……だって、死んでしまったら、もうあなたには……ああ……フェレロ……テレシアはどうすれば……」

渡りゆくヴーに思いの丈をたくして、テレシアは今日もコトネをその流れに委ねる。巡り巡って愛しい人の心に届くように、本当のフェレロに、また出会える事を信じて。

「おい！アレ、あのマツキナ、ゴランとこの坊主じゃないのか？」

「帰って来た？本当だ、手を振ってる……あんだ、はやく旦那に知らせておいでよ！」

「あ、ああ、わかった」

ひととき眩しい惶波を振りまきながら一機のマツキナがオーデル上空へとさしかかる。入りくんだ細い道の両脇に広がるわずかばかりの田畑、その端にしがみつくように点在する民家の村人達はみないつせいに空を見上げ、鈍色の空に描かれてゆく機体の航跡を指さした。フェレロはその光景に少し照れくさくも誇らしい気持ちになった。

「何か、すごく久しぶりみたいな気がするね……みんな、心配してただろうな」

「ただいまー！帰って来たよー！」

「ようし、ビクトリーロールだ」

「……？え？きゃああ！」

中央広場の噴水の上空でF/Fは派手な3連続ロールを披露して  
みせる。知らせを聞いて家の外へと飛び出したゴランは歓喜の声を  
あげた。

「フェレロ！あいつめ、帰ってきやがったか！」

いったん村を通り過ぎたフェレロは減速のためF/Fを旋回に入  
れた。村はずれの草原から風上に向かって高度を下げてゆく。その  
場周飛行の最中、フェレロは草原に見た事もないような巨大なマツ  
キナが着陸しているのを見つけた。F/Fの10機分はゆうにある  
うかという翼幅、随所に設けられた放熱口から放たれる惶は機体の  
大きさに比肩して強大で、小さなオーデルの集落の隅々までを照ら  
していた。下部に開放している巨大な扉の元には大勢の翼士隊のソ  
ラウィが整列しており、一部は村内へと進入を始めている。ハナは  
心配そうにフェレロに聞いた。

「ねえフェレロ、村でなんかあったのかな……」

「すごいな……あれ、マツキナなんだよね……飛ぶんだよね……」

「フェレロ……そっちじゃなくてッ」

大型飛行機械に目が釘付けになってしまっているフェレロをハナ  
は小突いた。見てよ！あんなに沢山のソラウィが村の中に入って来  
ているのに！フェレロはその縦隊の上を低空でかすめつつスキッド  
を展開し着陸態勢に入る。頭上を突き抜ける乾いた機関音に行軍中  
の翼士隊は即座に警戒体勢を取った。

「上空にマツキナ！」

「対空防御！君将をお守りしろ！」

数人の従者によって瞬時に張られる惶の掩体、その周囲を取り囲  
んでいる屈強な翼士がF/Fに向けて惶波を撃とうと身構えるのを、  
全面滑らかな純白の鎧に身を包んだソラウィが手をかざして制止し  
た。

「よせ、手出しは無用だ」

「何故です？ 君将！ 危険であります！」

「わからぬか、あの美しき揺らぎ……見事な惶ではないか……」

その声は女性であった。見れば頭部のほとんどを覆っている胄の首筋からは黄煌色の長い髪がたなびき、ソラウイの象徴でもある七色の翼に重なりベイルのように長く風を孕んでいる。まるで花嫁のような清楚で艶やかな佇まい、しかしそれとは裏腹に胄の間隙よりわずかに覗く燃え滾る瞳、そして厚い装甲の裏からでも透過してくる惶の光芒は並み居るソラウイの比ではなく、その力をもって国を統べる種族の長にふさわしい威厳と畏れに満ちている。「白き甲胄の皇女」は先ほどF/Fを撃とうとしていたソラウイを呼びつけて命じた。

「貴公、あの者の居所を確保せよ」

「はッ！ 拘束致します」

「そうではない、あの機体、カロンの報告にあつたマツキナかもしれないのだ。もしそうであれば協力を仰ぎたい」

「協力……？」

従者の翼士は怪訝そうな表情を見せた。このリエラにおいてソラウイとヒュピアの間には厳然とした格差が存在しており、いわば劣等民族といえるヒュピアに対してソラウイは蔑みにも似た感情を抱いているのだった。

「何もあのような卑しい者の助力を得なくとも……それに君将、あのような小民のマツキナにヴェルクトウを浮上させる力があるとはとても思えませぬ」

「そうか、貴公はあの機体に何も感じなかったのだな……ソラウイともあるう者が……それでは我が望を共に成し遂げることなど出来ぬ。もうよい、私が赴く」

「ネ……ネュピアス君将！」

白き甲胄の皇女、ネュピアスは肩より靡かせた翼を大きく広げた。溢れんばかりの惶波が周囲を覆いつくし、彼女の白輝の甲体は遙か高空へと舞い上がった。俯瞰する小さな集落、村はずれの平坦な草

原をバウンドしながら滑走しているF/Fを見つけたネュピアスは、遅れて随伴してきた翼士たちにそのマツキナを指し示した。

「お一人では危険でございます！」

「フン、行くぞ、遅れるな」

わざわざ通常の手順での着陸を試みたフェレロは、十分に推力を絞れない新しい妖精機関に戸惑いながらも、なんとか失速に入れて荒っぽく機体を接地させた。急激な沈下により二度三度バウンシングしたF/Fは前縁で原野の草を刈り飛ばしつつゴランの家の庭へと向かう。ハナはまたまた落っこちそうになつてフェレロに叫んだ。

「なななななんて着陸するのよーッ！」

「あつつ……特別なマツキナって思われるのはまずいよ、だってさっきの……あれはソラウイの……あれ？」

「ねえフェレロ、前ツ！家にぶつかっちゃうよ！」

「……うん、止まんないみたい、アイドリングに出来ないのかな、この機関」

「えー！せつかく帰ってきたのにこんなのいやー！」

一度満ちたチェンバーの内圧は類いまれなレネリイ、ルウラの過剰な惶の供給によりなかなか低下しない。あふれ出す残存推力はあらゆる手段を講じてF/Fを減速させようとするフェレロの操作など全く受け付けずに機速を保ち続ける。フェレロは伝声管に叫んだ。

「ルウラ、緊急パージするよッ！」

「アイ？」

動作異常時にレネリイの安全を確保するため、妖精機関には大抵脱出装置が備わっている。フェレロは黄色で縁取りされた赤いカバ―を跳ね上げ、その奥の取っ手を思いっきり引いた。機首のカバ―が飛散し、むき出しとなった機関部の中央から円筒形のシリンダーが勢いよく射出され宙を舞う。白煙と共に突然推力を失ったF/Fはつんのめるように地面へと突き刺さり、周囲の柵をなぎ倒してよ

うやく止まった。急停止で計器盤の縁にいささかおでこを打ちつけてしまったハナは涙目でフェレロにわめく。

「いったー……もーいつもこうなんだから！フェレロのヘタクそ！」  
「はー止まった……ごめんハナちゃん、痛かった？ハハ、赤くなってる」

「うう、あたりまえだよー！」

「ハナ！よく無事で戻ったな！フェレロも……」

駆け付けたゴランは、二人のいつもの掛け合いにホッと胸をなで下ろした。あれだけ派手な着陸を敢行したにもかかわらず、華奢なはずのF/Fの損傷はほとんど皆無であり、ゴランは改めてフェレロの飛行感覚に感心した。

「ただいま戻りました、ゴランさん」

「うむ」

「ねえパパ、あのね、あのね！」

フェレロははしゃぐハナに気づかされて上を見た。ヴーの薄い明るいオーデルの空、通常なら降下傘を展開して着地の衝撃を和らげるはずの妖精機関のシリンダーは、なぜか射出された形状のままてふわふわとこちらへと漂ってくる。ゴランはその光景を見て驚いた。

「！……な……なんでシリンダーがひとりで浮いているんだ？」

「へっへー、すごいでしょ、すごいでしょ！」

ハナは早く話したくて仕方のない様子、フェレロは近づいて来たシリンダーを手にすると、ゆっくりと地面に置いて鉤を解放した。隙間から鮮やかな惶波が溢れ出し、眩い光球と共に元気な声がひびいた。

「アイアイッー！」

「な……こいつがあの重いシリンダーを浮かせてたと言うのか……しかも……この輝きはいい……」

「うん、この子はルウラ。でもね、ネーロなんだよ！」

「何い……お前ら……まさか、本当にラーマへ降りたのか？」

「はい、そこでこの子はネーロにしてもらったんです」



ラーマがどんな所かをよく知るゴランには、半人前の彼らがあの谷底に行つて戻ってきたなんてとても信じられなかった。しかし目の前でフェレロと戯れる蒼の光に包まれたルウラは、確かに無限の惶を持つと言われる最上位のレネリイ、ネーロの姿に間違いなかった。ゴランは周囲に目をやると、荒つぽく手招きしてフェレロ達を招き入れた。

「村外れにソラウイの巡惶艦が不時着してるんだ、取りあえず皆中へ入れ、話はそれからゆつくり聞こう」

「ああ、あれが……わかりました」

「ごはんだごはんだ！ 行こ、ルウラ」

「アイ……イ？」

ルウラが何かの気配を感じて振り向いた、そこには真紫の軍装を纏つた従者に守られた、大リエラ翼士隊君将にしてその頂点に立つソラウイの指導者、ネュピアスの姿があつた。

「少年よ、その話、私にも聞かせてもらおうではないか」

簡素な佇まいのゴランの住居、広くはない居間でネュピアスとその従者からの詮索を受けているフェレロを、ゴランとハナは台所で調理のふりをしながらちらちら覗き込んでいた。リエラの指導者……フェルビナクを滅亡させ、一代でこのソラウイの国家を築いた圧倒的な力を持つ種族、新地漸において自らの惶の消費を押さえるために着用している全身を覆う甲冑は、二人にとつて忘れる事のできない憎悪の対象なのであつた。ゴランは手にした調理用のナイフを握りしめてこみ上げてくる激情に耐えていた。

「あいっ……！ 出来るなら、今すぐにも切り捨ててやりたいぜ……」

「……パパ、だめ、そんなことしたら……でも……ハナだつてくやしいよ、見てるだけなんて！」

「毎晩エレナや国王、そして焼かれて死んでいった多くの民の声が

聞こえるんだ。フェルビナクを返せと……なのに……」

「おい、俺たちはソラウイだ、食事ならいらねえぜ。変なこと考えてないでこっちへ来い」

随伴してきた翼士が台所でこそそこ話しているゴランとハナに声をかけた。フン！口なし鳥のエサなんか誰がつくるか！フェレロ……フェレロにはわかんないんだよね……私たちのこの気持ち……ハナは複雑な気持ちで居間のテーブルの面々を見つめた。フェレロは凜とした態度でネュピアスとの交渉に臨んでいる。ゴランはそんな物怖じひとつしない彼の度量に頼もしささえ感じていた。

「つまり、出力不足で不時着してしまったあなた方の巡惶艦を動かすのに、ルウラを差し出せということなのですか？」

「出来ればそうして欲しいが、強大な惶を秘めているネーロの意思を無視してむりやり従わせるのは無謀というもの、我々も貴重な艦を失いたくはない。ヴェルクトウが首府に戻るだけの力を貰えればいいのだが、協力してもらえないだろうか？」

冷酷非道で知られるネュピアスらしからぬ穏健な交渉に従者は首を傾げた。その惶波をもつて広大な国土を瞬時に焦土と化した翼士隊、彼らにとって”普通の”レネリイなど脅威でも何でもないものであった。一向に進捗しない交渉にいら立った翼士のひとりが、やあらルウラをわしづかみにしてネュピアスに進言した。

「ア、アイイイ！」

「君将！こんな奴さつさと頂いて帰りましょう！」

「馬鹿者！やめんか！」

次の瞬間、その翼士の身体が一気に膨張したと思うと、無数の光の球となって爆散した。冷たく燃えながら部屋中に飛び散るソラウイの肉、程なくそれは燃え尽きて光を失い何も残さずに消滅した。側にいた従者達は恐れおののいて後ずさりする。

「な……き……消えた……」

「愚かな……惶力においてネーロはお前達より遥かに高位の存在なのだ。いいか、絶対手荒な真似をするな……すまないフェレロ君、

無礼をお詫びする」

「い……いえ……ルウラ……何も……」

「アイ！アイ！」

初めて見たネーロの力の凄まじさにフェレロも言葉を失った。純粹であるが故の容赦ない惶の放出は一人のソラウイをやすやすと消し去ってしまったのだ。フェレロはぶんぶん腹を立てているルウラにおそろおそろ話しかけた。

「ねえルウラ、さっきの人はあれだけど、この人たち、マツキナが飛べなくて困っているんだって、助けてあげられないかな？」

「アイ！」

「うーん……だめ？」

ぷいと横を向くルウラ、余程さっきの手荒な扱いが気に障っているようだ。苦笑いしてそのくるくるした巻き髪をつつくフェレロにさえ仏頂面を決めつけている。しかしそんなルウラの心に、どこからかすかに助けを求める同胞のコトネが響いてきた。

「ア……アイ……」

「ルウラ？どうしたの」

「アイアイ！アーーーーーイツ！アイ！」

ルウラは突然悲痛な表情でフェレロに叫んだかと思うと、庭で半分めり込んでいるF/Fへ向かって飛び出していった。フェレロはあわててその後を追う。

「ルウラ！」

シリンダーの射出された妖精機関の中央部の孔を指差してルウラが呼ぶ。フェレロははっと気がついて足下に転がっている円筒を拾うと、今にも泣き出しそうなルウラのもとへ走っていった。

「……たくさんのレネリイがああ巡艦……ヴェルクトウの中で焼けている？そうか、あの機関にはオーギュメンタが……わかった、すぐ上げるよ！」

フェレロはシリンダーを機関に元通りに装着した。ルウラは待ちきれないかのように自ら機関を始動させ、F/Fは暖気もないまま

臨界に達した。

「おい貴様ら！どこへ行く？」

ゴランの住居の外苑を警備していた翼士達が、今にも浮上しようとしているF/Fの行く手を阻む、フェレロはルウラの心の声を背後のネュピアスに向けて叫んだ。

「あなたたちは気に入らないけど、同胞が苦しんでいるのを助けた  
いって言ってます」

「わかった、感謝する。かまわん、通せ」

「し……しかし……」

「ルウラ、巡惶艦へ！」

「アイ！」

F/Fは一瞬翼を傾けたかと思うと、閃光を残して村外れへと消えていった。そのあまりの速さに翼士達はなす術がない。ただ呆然とその航跡を見送っている彼らを、ネュピアスが激しく叱咤した。

「なにを惚けているか！追え！ソラウイを名乗るなら追いついてみ  
せろ！」

「ハ、ハイッ！」

慌てて後を追う随伴の翼士隊達、しかしその駿さの差は歴然で、ネュピアスは自らの種族の力の衰退を悟らずにはいらなかった。

「急がねば……もし、あのレネリイがラーマからもたらされた物だとすれば、その元凶は……」

そう言つと、ネュピアスもその後を追うべく高く虚空へと舞い上がった。

見上げるほどの高い両翼、首府の礼拝堂かと思えるほどに広大な機体の動力室に案内されたフェレロとルウラは、その床面を埋め尽くすおびただしい数の妖精機関を目の当たりにして言葉を失った。ルウラの輝きに気付いて顔を上げ、二人のもとへと歩いてきた研究者風の男……どうみてもヒュピリアなのだが……その男は興味深げ

にルウラを注視するとフェレロに右手を差し出した。

「ああ、協力感謝するよ。私はハース・ラニガン、リエラの技術者だ。よろしく頼む」

「これは……い、いったい何基の妖精機関があるんですか？」

「片舷120基、浮上用も合わせると計302基になるな。それでも慢性的な出力不足だよ」

フェレロは差し出されたハースの右手に気がついてあわてて握り返した。

「これだけあっても足りないんですか？」

「ああ、どうもレネリイの惶波を過大評価していたみたいだね。過熱で次々とダメになってゆくんだ。今まともに稼働しているのは6割くらいだな」

「ダメって……それじゃ中のレネリイは……」

フェレロはF/Fで赴いたラーマの底での出来事……限界以上の惶を放出してしまったルウラの悲惨な状態を思い出して戦慄した。馬鹿な……ここにはあんな状態のレネリイがいったい何人いるって言っただ！フェレロはハースの胸ぐらにつかみかきたい衝動をぐつとこらえて指示を促した。

「どうすればいいんだ？早く！このままじゃみんな死んでしまう！」

フェレロの切迫した言葉を受けたハースは、それでも飄々として手近のいくつかの妖精機関を点検して回った。そのうちの一つ、完全に出力が途絶えてしまっている機関の前に立ったハースは、シリンドーの横に突出している排気弁のコックを捻った。

「ん？全然圧がない……これは焼失してしまってるな。丁度いい」

ハースはシリンドーを解放した。高熱でゆらぐ筒内にはレネリイの姿はなく、ただ鼻を突く匂いがその主の運命を物語っていた。フェレロはこみ上げる異物感に思わず口を押さえた。

「ここを使ってくれ。全ての妖精機関に直通している部位だ」

「あの……オーギュメンタ、切ってもらえませんか……おえ……」

咽ぶフェレロの姿を冷ややかに見つめるハースは、表情一つ変え

ずに循環ポンプの接続を断った。

「余熱でしばらくは熱いがそのうち冷える。ネーロの出力、見せてもらつよ」

「……はい……ルウラ、こつちだ」

怒りと不快感でおかしくなりそうな頭を何とか正気に保って、フェレロは示された妖精機関にルウラを呼んだ。筒内に残る気配に気がついて目を伏せるルウラ、でも鼻を押さえてひと思いにシリンドー内へと身を投じた。ハースが起動位置へと操作輪を回す。

「頼む、フェレロ君」

「……ルウラ、コンタクト」

「アイ！」

「な……なに？」

不意に動力室内の妖精機関の出力が総て途絶えてしまった。機内の全照明が落ち、外部へと放出されていた大量の惶の放出もぱつたりと止まった。深刻な事態に騒然となるソラウィ達、彼らにとつて惶の供給を断たれるという事は死活問題である。ヴェルクトウへと戻ってきたネュピアスは艦に発生した異変を知り、狼狽える部下達に詰問した。

「おい！何をやっているか！」

「は、と、突然機関が停止してしまいました……」

「何だと……あの小僧、何をしてくれたというのだ」

ルウラの発する強烈な惶の波動を察知したネュピアスは一瞬にしてその場から消えた。機体の中央部、重心位置の床下に設けられた動力室に忽然と現れた彼女が見たものは、暗闇に閉ざされ、眠っているように静まりかえった妖精機関の縦列だった。

「ハース！どうなっている？」

「おや、これは君将、どうやら一旦全ての接続を遮断してしまったようですな」

ハースは隣に現れたネュピアスには目もくれずに、生体組織のように相互に結合された妖精機関群を凝視していた。やがて仄かな惶

の発光がひとつ、またひとつと灯りはじめ、それは見る見るうちに全てのシリンドーへと伝播していった。微かな振動音と騒然と飛び交うレネリイ達のコトネ、その高まりが頂点に達したとき、各々の妖精機関が一斉に燦然と光芒を放ちはじめた。

「うわっ！」

「き……来た……」

轟々と唸りを上げるヴェルクトウの主機関、過給圧は許容範囲を振り切つてなお高まつてゆく。蒼光に目も開けていられないほどの多量の惶の放出の中で、ハースは身震いしながら計器盤に目をやった。

「す……すごい！今までの稼働率を遥かに超えている！」

フェレロはしばし機関の周囲に巡らされた導惶索を走る多様の惶波の往来に目を奪われていたが、その中で交わされているコトネの中に聞き覚えのある声を感じて、慌ててルウラの飛び込んだシリンドーに駆け寄つて叫んだ。

「ねえ！ルウラ！大丈夫なの？」

「アイ」

「……よかった、うん、今出してあげるね！」

フェレロはホツとして機関からシリンドーを排出した。さつきとは違って冷やかな感触の円筒から飛び出てきたルウラの輝きはさすがにちよつと弱々しく、ふらふらとフェレロの肩に止まると安心したようにその首筋にもたれかかった。室内の妖精機関の隅々にまで行き渡ったルウラの惶波は生き残っていたレネリイ達の命数をネーロ並みに回復させているようで、フェレロはテレシアから連綿と受け継がれている惶の連鎖に運命的なものを感じながら、頬を寄せてくるルウラに優しく言った。

「ありがとう、ルウラ」

「アイ」

「うん、みんな元気になったんだね。よかった……ルウラ、帰ろうか」

「アイアイ」

今までにない強大な力をその手中にしたハースは完全にその虜になってしまっていた。各部署に次々と指示を出し、再びこの巡惶艦を浮上させるといふ野望で恍惚としている。フェレロは彼に対する嫌悪感を残しつつも、ルウラを伴って動力室を後にした。

「フェレロ君、どうやら礼を言わなければならないようだな」

「え？……い、いえ……お役に立てて良かったです」

一部始終を見守っていたネュピアスがフェレロに労いの声をかけた。リエラの、ハースのやり方は確かに気に入らないけれど、少なくとも大勢のレネリイを助けられたことはフェレロにとって何よりも嬉しいことなのであった。手厚い警護に囲まれて機外へと歩み出てきたフェレロとネュピアスを、走って追いかけてきたハナとゴランが出迎えた。

「フェレロ！」

「ハナちゃん、上手くいったよ」

「アーイツ」

巨大なヴェルクトウの翼の下、まるで観閲式のように整然とならんだソラウイの隊列を背に、従者を従えて歩いてくるフェレロ達にハナとゴランは目を見張った。

「フェレロ……なんか……ソラウイの英雄みたい……」

「ああ……好かん……」

護衛してきた翼士が敬礼をして引き下がり、共に向かい合ったフェレロに向かってネュピアスは質問した。

「フェレロ君、どうやら君はマツキナの操縦に長けているようだ。今度のジャントウユには出場するの？」

「え……ええ、一部予選からですが」

「なるほど……首府に到着したら我が居城に立ち寄るといい。寝所と食事を用意させよう」

「え？……は、はい、し……しかし……」

思いもよらぬネュピアスの申し出にフェレロは驚いた。ソラウイ



の、そして一国の王とも言える人物による王宮への招待、それはかつてヒュピアでは誰も受けた事のない最大級の歓待であった。返答に臆しているフェレロを残し、ネュピアスはヴェルクトゥ発進の檄を飛ばした。

「では、健闘を期待している。ヴェルクトゥ、発進だ！」

「あ……はい、ありがとうございます」

ネュピアスは護衛を伴ってヴェルクトゥの機内へと戻っていった。居並ぶソラウイ達が整然とそれに続き、解放された扉がゆっくりと閉じてゆく。フェレロ達は次第に強まってゆく惶の噴出に慌てて距離をとった。

「ねえ、どうだった？あのマツキナ」

「ハナちゃん……うん、よくわかんないんだ……大勢のレネリイに無理させて、どうしてあんなに沢山のソラウイを乗せなきゃいけないんだろう」

「フェレロ、あれは、恐らく他国がどこかを侵略するために建造されたものだ……惶のない地域において兵を活動させるための、いわば空飛ぶ惶泉ってところだろうな」

ゴランの洞察はたしかにその巨大な巡惶艦の任務を暴いていた。草原に吹きすさぶ惶波の中、フェレロは浮上してゆく大きな影に得体の知れない畏怖を感じずにはいらなかった。

「ネュピアス……首府で……いったい何が待っているっていうんだ……」

## 第6話「ミラージュ」

リエラの国土の3割を占める広さを持つ惶湖ビルケウ、広大な水平線は遠く大地とヴーが交わる彼方にまで続き、湖底より沸き出でる碧い光の放射はこの地に燦々とした明るい世界と多くの恵みをもたらしている。そのビルケウの中央部に隆起した広大な陸地……中央に聳える天を突く壮麗な王宮とそれを取り囲むように立ち並ぶ近代的な市街地、ひしめき合うように平野部を埋め尽くす居住区、荷物を満載した車両や人々でごったがえす港への街道……周辺の街から港への航路を行き交う船やマツキナのおびただし数は此処がリエラという国の政治、経済の中心地である事を雄弁に示している。フェレロは湖面から溢れる光を翼にきらめかせたF/Fを首府の上空へと滑らせた。

「ねえねえフェレロ、ついなら埠頭のワーフにいこ！あそこの力二大好きなんだ！……わくわく」

「今は街区はコースになつてから勝手に入れないよ……ってハナちゃん、僕ら遊びに来たんじゃないんだけど」

ほとんど旅行気分のハナにフェレロは軽く目眩がした。

「だつておいつちゃん、あのソラウィからお金せびつちやったおかげで工場離れられなくなって、ハナにかわりに行つてつて言うんだもん」

「もう、出力曲線とかフラップの効きとか飛ばしながら調整してもらいたかつたのに……これじゃ一人で参戦してるのと変わんないよ」「そんなことない！ハナだつてハンターの端くれ、色々パパから習つてるんだから！どーんとまかしといて」

「大丈夫かなあ……ん？」

濁った航跡を長く曳いて、左右より臨海警備のライトニング隊がF/Fに随伴してきた。フェレロはゼッケンナンバーがよく見えるように翼を振って見せ、長機に許可番号を発光信号で送った。短く

簡潔な答信が返ってくる。

「へえ、王宮の駐機場まで飛んで行っていいんだ……今回は港で運び屋さん探さなくていいから助かるね」

「宮殿まで飛んでっちゃうの？ちよちよちよと待って、ハナ、ここでおるッ」

「無理だよ、ほら、僕らは警戒されてるんだから」

フェレロはハナに親指で後ろを指し示した。王宮へのアプローチに入る先導機、F/Fをはさんで殿に占位するもう一機のライトニングは、砲門の軸線をぴたりと合わせたまま追従してくる。フェレロはオーデルでの経験から主機関を停止して飛行してした。

「今は離脱しても逃げ切る自信がないよ、すぐ失速しちゃう……でもルウラ起こして王宮に突っ込んだじゃう訳にもいかないしね」

「はぁあ、ソラウイって何も食べないんだよ……そんな奴らのところにおいしいものがあるわけないよなあ、がつくし」

王宮の敷地内にある首府防衛隊の駐機場はリエラの中でも最大の規模を誇っており、十時に交差する滑走路と数多くのハンガーを擁している。稼働機数は2個飛行隊合わせて50機を数え、常に2機が緊急発進出来るように滑走路端に待機している。訓練に飛び立つ機の甲高い機関音と交錯する整備員、乾いた空気を震わせる惶の熱波……無事に着陸を終えたフェレロ達は彼らの力の象徴とも言えるその規模に圧倒された。

「……すごい……王宮内にこんな所があったなんて……」

「うるさいうるさいうるさい！フェレロ、耳がどうかなっちゃいそうだよ！」

「フェレロ君だね、ようこそ首府へ。君将がお待ちです」

「あなたは……ハースさん？」

機首カバーを解放して機関を冷却しているF/Fの所へ現れたハースは、煤で薄汚れたフェレロの顔を見てはつが悪そうに笑った。

「いやあ情けない、ウチの機体はどれも黒煙を吐き過ぎているようだ。君の子みたいにきれいに還元できるレネリイがうらやましいよ」

「あの……ここの整備の人たち、みんなヒュピリアなんですか？」

「ああ、ソラウイの連中は機械はからきし駄目だから……もともとマツキナや妖精機関は我々ヒュピリアの技術だ。王宮では他にも雑多な業務に多くのヒュピリアが従事している。待遇は様々だがね」

「ハース技師長、彼らを謁見の間へ、君将がお待ちになっている」

「ああ、わかった」

側のソラウイに促されて、ハースは二人を王宮の中へ行くよう手招きした。フェレロは慌ててシリンドーを解放すると寝ているルウラに声をかけた。

「起きてルウラ、一緒に行こう。また勝手に飛びまわられたら大変だ」

「ふぁ……ア、アイ」

惶に溢れる外気に触れたルウラは気持ちよさそうに伸びをした。

身体から透けだしてくるような鮮やかな蒼はネーロ独特の澄んだ輝き、ほんのりと暖かみのある光を放つ普通のレネリイとは明らかに異なっている。ハースはそんなルウラを興味ぶかげに見つめながら宮殿へと向かう回廊へと二人を導いた。磨かれた石張りの長い廊下に響く3人の靴音、フェレロとハナは整然と並ぶ白い柱と両側の壁面に置かれている衣裳や装身具、それから数多くの絵画に目を見張った。

「この回廊には前の王朝の宮内がそのままの状態で残されている。

ソラウイによる徹底的な破壊のあげく、今となってはここにある遺物のみが当時の繁栄を知る縁となってしまった」

「へえ……あ、見てフェレロ、この画、ソラウイがヒュピリアと手を取り合ってるよ。変なの！」

「え？わあ、きれいな画だね……」

回廊の中程にあるドームに描かれたひとときわ鮮やかな壁画、天に届けとばかりに込められた祈りはるか天井にまでその想いで彩られ、窓から差し込む光に照らされた穏やかな面持ちのソラウイ達の乱舞は見る者を安らかな空気で包み込む。フェレロはそのめくるめ

く筆跡に魂を奪われた。

「これは、かつて行われたソラウィとヒュピアの婚礼の際に描かれたものだ……もう、随分昔の事のような気がするな」

「えー！そんなことってできるの？ねえフェレロ」

「……」

「フェレロ？」

小刻みに震える膝、瞳は何かに怯えるかのように一点を凝視する。フェレロは両手で顔を覆うと膝をついた。

「な……何なの？……人が……そんなの………そんなの見たくないよ！どつかへ……どつかへ行ってくれえッ」

「フェレロ！ど……どうしたの？」

「いやだ、いやだあああああ！」

「フェレロ！しっかりしてッ！」

突然頭を抱えて狂乱しはじめたフェレロをあわてて押さえ付けたハナ、しかし全くおさまる気配が見られない。ハナは周辺に漂う異様なコトネの気配を感じた。

「これは……ヴー？どうしてこんな所に！」

「いかん、夢憑されている！」

「フェレロ！」

「？……アイ！」

あちこち寄り道して遅れてしまったルウラは回廊の先で響く悲鳴に気がついてあわてて飛んで来た。血相を変えて恐れおののくフェレロ、それを見たルウラは暴れる彼の額に手をあて惶を集中させた。  
「ルウラ？何を……」

「アイッ！」

放たれたルウラの惶波はフェレロの体内へと浸透して爆発した。閃光がフェレロの体内からほとばしり、その白い光に追い立てられるように渦を巻く黒いヴーの断片が吹き出した。

「で、出たー！」

フェレロの身体を離れた黒いヴーの塊はやがて融合して人の……

ヒュピリアの女性の姿となった。驚きのあまり声も出ないハナとハース、ようやく正気を取り戻したフェレロは前方の気配に気が付いて顔を上げた。

「……え？……あ……あなたは……」

「な、何と……ヴーが実体化するとは……」

何かを訴えるかのように近づいてくる黒い揺らめき、フェレロはその中にさつきとは違うコトネを感じてゆっくりと立ち上がった。そして手を伸ばしてその姿に触れようとしたが、ヴーの影は突然力尽きたかのようにその場に崩れ落ち、小さな欠片へと分解しながら消えていってしまった。

「……ど……どこへ？」

ひざが諤々のハナはおそろおそろ周囲を見渡した。上手くいってホッとするルウラ、さつきまでこの空間に満ちていたコトネはいつの間にか感じられなくなっていた。フェレロは脱力したようにすり込んで大きなため息をついた。

「はあ……はあ……これが……これがヴーに食われるってことなのか……」

「フェレロ！大丈夫？」

「なるほど……間違いない……あれはかつて、蒼明のソラウィがヒュピリアに施していた業……」

ルウラの浄癒の様子を見ていたハースは心地よい戦慄を感じていた。ネュピラスによるリエラ建国の際に行われたヒュピリア王朝および同胞への迫害……蒼の惶を抱くソラウィの一派、この地でヒュピリアと共に暮らしていた彼らは王朝の崩壊の際に彼女の命により一人残らず抹殺されたはずであった。今、目の前で起こった光の癒し、その禁断の輝きはハースの心に小さな野心を擡げさせるのであった。「蒼明のソラウィ……そう簡単には滅びないというわけか……クク、面白い」

「遠路はるばるよく来られた。遠慮は無用だ、ごゆるりと過ごさ  
れよ……ん？そちらの女子は？」

謁見の間に通されたフェレロとハナは、壇上のネュピアスの前に  
跪いた。ソラウイの権力の中枢、両脇に居並ぶ剣を携えた近衛兵の  
隊列が二人を息苦しくなるような緊張感で満ちた。そのひとつひと  
つの視線がまるで心の中を探られているようで、いつもは騒がしい  
ハナもすっかり押し黙ってしまった。フェレロは顔を上げて凜  
とした声で返答した。

「はい、僕の機体の空力の担当です」

「ほう、あのマツキナの設計者か、若いのになかなか有能のようだ  
な。ならば別室を用意させよう」

「はい、ありがとうございます」

（フェレロ！私こんなところでひとりぼっちはイヤ！）

（だ……だつてさ）

（イヤだったらイヤ！もし私がおそわれたらどーするのよ！）

（ソラウイに襲われたら僕でも勝てないよ）

（そーゆー意味じゃなくってッ）

「ん？どうした、まだ食事まで一時ある、暫し休まれるといい」

「では少し外出して来ます。明るいうちに時計出しておきたいもの  
で」

「ああ、ジャントウユの計時が始まっているのだったな。わかった、  
健闘を期待している。残照の刻までには戻られよ」

「ありがとうございます。では、ハナ、行こうか」

（「ハナ」だつて！なによ急に気持ちわるい……でもフェレロ、よ  
くこれだけソラウイに囲まれて平然としていられるよね……）

「ん？やることは沢山あるんだ、急いで」

「え？ハ……ハイ！」

ぎこちなく歩くハナに吹き出しそうなフェレロ、数人の近衛兵に  
付き添われた二人が謁見の間を退出してゆく。側にいたハースはそ  
れを見送ると深く一礼して壇上のネュピアスに報告した。

「おそれながら君将、先程壁画の間にてヴーと遭遇致しました」

「ほう、拠所の彷彿のコトネに気に入られたか、で、状況は如何に？」

「は、一時夢憑状態にありましたが、付き添っているレネリイが即座に浄癒いたしました」

「やはりな……先日のヴェルクトゥの時といい、あの羽虫にはどうやら忌わしき逆族の惶が宿っているようだ」

「救世主の掌の蒼……ですか？」

ネュピアスは王宮内での正装である裳の長いベイルを翻して立ち上がった。

「ハース、ヴェルクトゥは現時点でラーマまで飛べるか？」

「あの頂きまで高度を上げれるかは保証出来ませんな。ただあの小僧のレネリイの力を得られれば、あるいは……」

「わかった、カロンは戻っているな？ここへ呼べ」

そうハースに申しつけるとネュピアスはゆらゆらと灯を滾らせた瞳で窓の外を眺めた。今しも滑走路から浮上してゆくF/Fの明らかにライトニングとは違う涼やかな惶波、それはまさにビルケウの、そして惶泉より迸りでる慈恵の輝きであった。

「エティエン亡き今、あれ程の蒼の惶を授けられるソラウイがいるとすれば……フフ、まさかこんな近くに隠れ棲んでいたとはな……」

「君将陛下、カロン以下翼士隊親衛第3戦闘団第117機装遊撃隊、チエカ駐留の任より帰還いたしました」

フェレロ達と入れ替わるようにネュピアスの御前に屈強な翼士隊が参じて整列した。遠征より帰還した彼等の装具は損耗が著しく、カロンの報告を受けながらその状況に目をやったネュピアスは訝し気に質問した。

「随分と装具が乱れているようだな、カロン。反乱でもあったのか？」

「いえ、新造マツキナの街区での違法飛行の検挙の際に少々不手際がありまして……」



「ふん、最近翼士隊の練度が低下しているのではないか？発砲したとの報告も来ている。そのような威力行為はヒュピアの反感を募らせるだけだと何故わからぬ？」

「お言葉ですが、君将！」

カロンは声を荒立てた。

「今回の事態は対象機の予想外の高性能が原因であります。担当のヒュピアの技師には量産化を前提とした開発を一刻も早く進める様厳命致しました」

「貴様は指揮官ではないのか？その原因が自らの不徳にあると思わぬのか！いつも他力本願ではないか。ヒュピアに頼ってばかりでは何時か我らの威光は失われる。我ら紅潔のソラウイは長き放浪の後、自らの惶の輝きのみをもってこの安住の地を築き上げたはずだ。その誇りを忘れたか！」

ネュピアスは常々感じていた翼士隊の不甲斐なさに激昂した。部下の隊員の前で叱咤されるカロンは下を向いて屈辱に耐える。

「いよいよジャントウウである。当該マツキナと操縦者もこの地へ赴いているはずだ。よいか、どんな事があってもヒュピアのマツキナに負ける事があってはならぬ。彼等のソラウイへの畏怖の念が絶える事は即ち我らの支配そのものが崩壊するという事なのだ。それを肝に命じて練達せよ！」

「はッ！」

「よろしい、次の任は追って指示する。解散！」

甲靴の音が揃って謁見の間に響き、敬礼を終えた翼士隊員が退出してゆく。ひとりその場に残ったカロンは拳を握りしめて顔を上げ、壇上のネュピアスと対峙した。

「カロン、今回は厳しい闘いになる、覚悟して挑め」

「母上、あの機体はこれまでのヒュピアのマツキナとは桁違いの性能を持っています。私はともかく、今の衰えつつあるソラウイでは……」

「声が高い！……判っている、あれは最高位の蒼の執師の力を得た

機体だ」

「な……なんですって？」

ネュピアスは壇上からカロンの下へと降りて来て、顔を寄せ小声で語りかけた。

「どうやら奴等の生き残りが未だこのリエラに潜伏しているらしい、おそらく、ネーロとはその者が生み出したレネリイの変種なのだろう」

「まさか……あの肅正を逃れた者がいるなど……して、そのソラウイとは何者なのですか」

「フフ、そう聞くか」

カロンの疑惑の目を突き刺すようにネュピアスは言った。

「蒼明のソラウイの長エティエンの娘、テレシアだ」

ソラウイの居住する市街地区のほぼ中央に位置するリベラシオン広場、普段ヒュピアは立ち入る事の出来ない特区に位置するかつての王家の庭園もこの時期だけは解放され、様々な露店や催事の天幕で一杯に埋め尽くされる。建国祭最大のイベント「ジャントウユ」は首府の市街地および公道を使用するマツキナの競技会であり、リエラ全土より我こそはと参戦してくるハンター数は100人は下らない。レネリイ一体、あるいはソラウイ一人によって稼動する妖精機関を用いていれば構造に制限はなく、それ故にマツキナ的设计者達は毎年様々な新機軸を盛り込んだ機体を開発してくるのであった。F/Fで軽くコースを回って来たフェレロは一旦パルクに戻ってくると、翼端に取り付けてある固定タブの修正を始めた。

「フェレロ、どう？」

「推力に余裕があるおかげで旋回中でも速度が落ちないのが助かるよ。それだけ身体にもきついけどね……ここはこうして、と……ハナちゃん、垂錘とって」

「はいっ、でもなんかほかのチーム、みんな速そうだね……お揃い

の服なんか着てさ」

ソラウィによる統治の以前からこの地で催されて来た伝統の競技、ジャントウユは、もともとハンター達の交流と技量の向上を旨として行われて来たヒュピアの祭事であった。リエラ建国後、ネュピアスはこの粗暴な競技がヒュピアの本能を呼び覚ます事を知り新国家の伝統行事として継続する事を決めた。もちろんヒュピアの文化を認める事により民衆の理解を得ようとする側面もあるが、なによりその競技においてソラウィが勝ち続ける事で彼我の絶対的な力の差というものをヒュピアの心理に植え付けるのがその本懐であった。ただヒュピアの上位入賞者に対しては高額の報奨とその機体の量産化契約の締結が約束されており、名だたる工廠の開発者達は皆多数の人員を擁してこの地へと乗り込んでくるのであった。

「お祭りだしいいんじゃないの？どのみち勝負はコースの中で決まるんだからさ」

「そうだけど……あ、あれ！」

「なに？」

「ソラウィのマツキナ！」

突然、翼の下から顔を出したフェレロの頭上を悲鳴と聞き違うようなけたたましい機関音を響かせて一機のライトニングが通過した。大きくバンクをとって周回コースへの加速区間へと進入してゆく。その機体に誇らし気に描かれた9個の星を認めたフェレロは弾かれるように立ち上がってキャビンへと飛び乗った。

「フェレロ？どうしたの？まだ調整が……」

「あいつだ！この前F/Fに一発食らわせた奴！ソラウィは予選走らなくてもいいのに……！見ている！ルウラ、出るよ！」

「アイ！」

獲物を見つけた獣のようなフェレロの瞳を見たハナはあわててゼッケンナンバーの書かれた時経香の束を運転台へと放り投げた。

「フェレロ！チャンスは3回だよ！」

「やってみる！ありがとハナちゃん！」

鈍く輝くライトニングを追ってフェレロは機体をコースへの導線に乗せる。彎曲した外周との合流地点、速度制限区間の旗を通過したF/Fは一気にその潜在性能を全開にした。見物客の帽子を軒並み吹き飛ばしてしまう程の強烈な惶波がコースを物凄い速度で突き進んでゆく。フェレロは計時門から吊り下げられている灯明に1本の時経香の先端を擦り付け点火した。

「遠慮はいらない、ルウラ、ぶっ飛ばして！」

「アイ」

もともと抵抗の少ない翼型を用いているF/Fは推力さえ十分ならばほとんど減速せずに急角度の旋回が可能である。しかしそれは逆に揚力が乏しい事を意味しており、僅かの操作誤差でたちまち失速してしまう悪癖をも併せ持っている。天性の感覚でこの機体を自在に操るフェレロはそれだけでもジャントウユでは注目されている存在であったが、今回トリガーにネーロを迎える事により第一線のソラウイに劣らない高速性能を得るに至った。同じ計時を走る参加者のマツキナの横を圧倒的な速度差で追い抜いてゆくF/Fに観衆はその目を疑った。

「おい！あのマツキナ、この前チェカでソラウイを手玉に取った奴じゃないのか？」

「凄え……一段と速くなってやがる……また一機抜きやがった！」

「決勝の賭け率が出てるぞ、奴は20倍だ！」

コースには一定区間ごとにゲートが設けられており通過確認が行われる。その数は30を数え、ひとつでも不通過の際にはその周回は無効となる。ゲートは概ね地表近くに設置されているため、ジャントウユの操縦者には低高度での正確な機体操作が求められる。当然事故も多く、ゲートの周囲は刺激を求める観客で埋め尽くされるのであった。フェレロはリパージュを全速で駆け抜けると左右へ切り返すシケインを最短ラインで抜けた。続く高速の左ターン、登り勾配のため知らず知らずのうちに高度を失い墜落する機体が多い場所である。微妙に曲率を変えてあるので減速せずに通過するのは至

難の技だ。賭博場を右に折れミラボーから駅までは低速区間、マツキナが良く見えてしかも接近戦が楽しめるとあって一番の観戦ポイントである。ここから一気に下ってゆくとその先には眩いビルケウの湖岸、右に折れた先は名物のトンネルである。小型のマツキナならギリギリ併走できる位の空間、僅かな誤操作や不規則な気流の影響が一瞬にして壁面への激突を招くコース一の難所だ。しかし多くのマツキナが自らの最高速をここで記録する。コースは観戦の船舶が鈴なりに停泊する風光明美な港へと下って来て、直角の切り返しの続く湾岸道路へと続いてゆく。ここは幅が狭く余程の実力差が無謀さがなければ前機を抜く事は困難な区間だ。煙草屋の手前を左に曲がり、大きな湧水池を巻くように続くコースは再び市街地へと戻ってゆく。低速のラスカスを抜ければ右にパルクへの進入路、最初の計時を終えたフェレロは1本目の時経香を天幕の張つてあるコース脇の治水池へと投げ入れた。

「だいたい分かつて来た、次、ちよつと無理するよ！」

「アイツ！」

2本目の時経香に点火したフェレロはほとんど減速せずにコースの端ギリギリを攻めはじめた。腹に力を入れ頭から血が引くのを必死で堪えながら、機体の腹を擦らないようにやや上げ舵で猛然と加速する。重力が抜け視野が色彩を取り戻した時、フェレロの前方に見覚えのある紅い惶波の迸りが見えた。

「！……追いついた？……」

有り余る惶波を持て余し気味に狭いコースを疾駆する白銀の機体、凄まじい立ち上がり加速はさすが第一線級の実動部隊のマツキナである。フェレロは身体中が総毛立つのを感じた。

「ルウラ、あいつを抜く、全てを僕にくれ！」

「アイ」

計時係の天幕の所へ1本目の結果を見に行っていたハナは、目の前を駆け抜けていったF/Fの鬼気迫る飛びっぷりを見て仰天した。「速い！速すぎるよフェレロ！まだ計時なんだから！」

「104号、一本目、3番時計！」

「えー!?」

ジャントウユの決勝は20機のマツキナによって争われる。上位から5番手までは前回の入賞者がそのままの順位を継承するため、今回もソラウイの指定席となっていた。現在行われている計時飛行はその残り15機の出走枠を争奪するための戦いであり、どれだけ速い時計を出せるか、残照の刻が近づくにつれその際どさは危険なほどに加速度を上げてゆくのだった。ハナは順位表の6番目に差し込まれたゼツケン104番、フェレロの名前を見てその速さを悟った。

「順位は6番だけど……3番時計……ソラウイより速く飛んでるの？」

「ああ、あいつはまだまだ飛ばすぜエ。畜生、面白くなってきやがった」

計時係もいつになく興奮気味に時経香の集計をこなしてゆく。ハナは再びコースに身を乗り出してフェレロの向かった賭博場の先に目を凝らした。

「フェレロ……いま6位だよ……すごいね……でも……無理しないでね」

ハースの手により更に改良されたライトニングの圧倒的な最高速ですんなりとコースの記録を塗り替えたカロンは、しかし少し前よりぴたりと追従してくるマツキナの気配を察知して後写鏡に目をやった。

「何だ……あの機体、着いてこれるといのか?この俺に……」

前回の優勝者、カロンは既に今決勝の最前列スタートを決定している。にもかかわらずより速い時計で周回している自分の機体に食いついてくるマツキナの影はカロンの心を焦燥させていた。ミラボ―で僅かにラインを外してしまったライトニングの短い翼が壁面を

擦る。

「ちィ！」

僅かな減速、しかしほぼ拮抗している両機にとってそれは決定的であった。続く駅前でフェレロはカロンの外側の僅かな間隙を突いて真横に並んだ。交錯するライン、ライトニングとの間隔は殆ど無い。狩猟用マツキナの証であるF/Fの濃緑色がライトニングの磨かれた機体に映り込む。両機は一步も譲らないまま湖岸への道を駆け下った。

「貴様……やっぱり来たか！」

「ミスした？でも……この先は狭すぎる！」

港湾部の屈曲路は併走するにはあまりに危険な区間、フェレロは一旦ライトニングの後尾についた。惶波と乱流で激しく機体が揺さぶられるが空気抵抗面では有利な位置だ。しかも低速では運動性に勝るF/Fに歩がある。フェレロはカロンから大きく遅れる事なく再びパルク前の直線へと戻って来た。

「ここならドラフティングが使えるな！よおおし……」

一系乱れぬ2機の縦隊が計時門を通過する、フェレロは最後の時経香に点火した。

「フェレロ？2本目は？せっかくいい時計なのにもつたいないよッ！」

時経香を投げ入れるため治水池へのラインを採ると漸く入り込んだライトニングの負圧域から外れてしまう。フェレロは速度を維持するため敢えて2本目の計時を捨てた。ライトニングにぴたりと追従して離れないF/Fにコース脇の観衆は湧きに湧いた。

「行け！坊主！ヒュピアの根性見せてやれ！」

「うひゃー！決勝よりよっぽど面白いぜ！」

「あまり期待させんな！くそ、賭率が下がっちゃうだろうが！」

割れんばかりの沿道の歓声、だがフェレロにはそれを感じる余裕など無い。気流の偏向に機体をあわせてゆくのに精一杯ではあったが、目の前に大きく惶を放つライトニングの尾部に食いついて行け

てるといふ事実はフェレロの心から一切の邪念を払っていたのである。まるで一心同体になったように感じるルウラの気持ち、フェレロはかつてマツキナの操縦を覚えていた頃の父親の言葉を思い出していた。

「……そうだね……レネリイと心をひとつにして飛ぶ事が大事なんだよね……ね、ルウラ……」

「アイ」

計器盤にきらめく惶の揺らめきが虹色にこたえる。更に加速し、まさに衝突せんばかりに背後に迫るF/Fにカロンは戦慄した。

「何故……何故離れない！うおおおおおお！」

トンネル内でカロンは持てる全ての惶波を妖精機関へと送り込んだ。排気口のフラップが全開となり、炎のような惶波が機体の何倍もの長さで噴出する。フェレロはクスツと笑った。

「すごいな……まだあれだけ伸びがあるなんて……でも、こっちだつて！」

「アイー！」

凄まじい惶波を浴びながらもフェレロは更なる速度域へと突入した。繰り返される強烈な加速と減速、ターン脱出時は血液が全部背中に集まってしまったのではないかと思える程の視野狭窄をもたらす。最終ターン、アンソニーの鼻を抜けたフェレロは溜めていた推力を一気に解放、少ない抵抗を利用して先行するライトニングの右横に並んだ。

「こ……こいつッ！」

「上手く纏まった！これで！」

フェレロは最後の時経香を渾身の力で投げ付けた。天幕にあたつた時経香は治水池に落ちて火が消え、その延焼部の境界までの長さで周回の時間が記録される。固唾を飲んで見守っていたハナは計時係の発表を待った。

「104番、現在までの1番時計だ……って、ハハッ、これを抜ける奴なんかちよつといねえよ」



「つてことは……フェレロ、やったよ！イチバンだ！キャーハハ！カニ食べ行こーカニ」

「凄げえ……こんだけ速い奴は初めてだぜ！ソラウィめ、いい気味だ、ハッハハ！」

「オイ！決勝も頑張れよ！お前ならレネリイの方から寄ってくるさア」

「バカが、飛ばし過ぎだ！賭率が4倍になっちまったじゃねえか……でも決めたぜ！ガッツリ稼がせてくれよ！」

驚嘆の聲が投げかけられるコースの外側のラインをF/Fはゆつくりと周回した。繰り返される過大な重力に身体こそ疲弊していたが、フェレロの心は確固たる手応えと自信ではち切れんばかり、共に限界に挑んだルウラに弾んだ声をかけるのであった。

「ルウラ、がんばったね！今までで一番いいスタート位置だよ」

「アイアイ！」

ルウラはまだまだ余裕の様子、フェレロはゆつくりと一周回って来てパルクヘF/Fを着陸させた。

「フェレロ！6番手スタート確定だよ！それに前にいたライトニングとほとんど同じ時計だったって！」

「ハナちゃん！よかった、みんなのおかげだよ！」

「アイアイ」

まだ計時中にもかかわらずF/Fの周辺に押し寄せる観衆の群れ、皆この新しいヒュピアの星を一目見ようと次々と広くは無いパルクへと流れ込んでくる。競技に支障が出るためやむなく介入してくる警備のソラウィ部隊、人垣で隔離されたF/Fと観衆の小競り合いの様子を俯瞰して見つめていたライトニング機上のカロンは、込み上げる憤怒の念に唇を震わせながら吐き捨てるように言った。

「フェレロ……よくも2度もヒュピアの前で恥をかかせてくれたな……ソラウィの名にかけて、決勝では必ず貴様を墜としてやる」

## 第7話「ゴーストレット」

白い光の中に、寄り添う子供達の影がゆらめく。

「ねえ、テレシアは帰らないの？」

「うん、今日からずっとフェレロのそばにいることになったの」

「ほんと？ やったあ！……でもどうして？」

「そ……それはね……」

ふと消えてしまいそうなあやうさ、それはとある物語の場面のようであり、もどかしく流転しながら繋がってゆく脈絡のないシーンは目覚めを待つ意識の中で柔らかく感情を昂らせる。

「……ごめん、いいなくなかったらいいんだ。そっかあ、これからずっとテレシアといられるんだ」

「うん……でもフェレロ、私……」

「だいじょぶ！ ぼくがテレシアをまもってあげるよ！ あ、そうだ、いっしょにおフロいこうよ！ ビルケウがにじいろにひかってとってもきれいなんだ！」

「え……ええっ？」

おい！ フロなんて行ったか？

夜通しにぎわう街をを仄かに照らすビルケウの漣がまだ覚めやらぬフェレロの瞳に光を与える。夜明け前のけだるい時間、建国祭で盛り上がるリベラシオン広場の喧噪もさすがにやや落ち着きを見せているようで、人々はやがて訪れる競演の時を語り合いながら湖の目覚めを待っていた。フェレロは上体を起こすとまだ薄暗い室内を見渡した。となりのベッドではハナが静かな寝息をたてている。君将主催の決勝進出者への激励の宴はソラウイの操者やヒュピアの技師を交えてそれは盛大にとり行われ、慣れないフェレロとハナは勧められるまま様々な料理や飲物をたらふく頂いたあげく、よいよ

いになつて早々と就寝してしまつたのだつた。頭がはつきりしてゆ  
くにつれ思い出されてくる昨日の出来事、しかしそれにかき消され  
ようとしている目覚める直前の幻影をフェレロは手繰りよせた。

「……夢……なのか……テレシア……今のは……ラーマで出会つた  
あの子……けれど……」

徐々に増してゆく湖面の輝きは港町のシルエツトを街区へとなげ  
かけ、上空を覆っているヴーに蒼い色彩を与えてゆく。ビルケウの  
「惶」によつてもたらされる首府の朝、遠く近くに刻を告げる鐘の  
音が聞こえてくる。フェレロはえもしれぬ郷愁を胸におぼえながら  
バルコニーへと出た。ひんやりとした朝靄が体を包み込む。見上げ  
る王宮の尖塔は鋭く惶に照らされる天を指し、その印象的な光景が  
フェレロの魂の深層に語りかけてくるのであつた。

「何だろう……首府……あたたかさと痛さがいつしよにやってくる  
……ここはいつたい……」

目映い旭光のなか、一条の光がまっすぐフェレロの方へと飛んで  
来た。朝いちばんの瑞々しい惶を身体いっぱいに浴びてきたルウラ  
は大袈裟なポーズでその力を誇示してみせる。フェレロは笑顔を見  
せた。

「おはようルウラ、いよいよだね」

「アイ」

「どう、ひとつ飛びいこうか？」

「アイアイ！」

フェレロは昨日から着たままのゆるんだ装具をキリリと締め上げ  
て部屋の扉をそつと開けた。天窓からの光はまだ弱々しく、絢爛と  
した屋内の装飾もその鮮やかな色彩を見せてはいない。部屋から出  
たフェレロはそつと扉を閉め、錠前がかかったのを確認すると忍び  
足で階下へと降りていった。謁見の間を抜けて、ロビーの庭園側  
にある駐機場への回廊へと向かおうとしたとき静かな、しかし張りの  
ある声がフェレロを呼び止めた。

「……こんな早朝からどこへ行くんだ」

そこにはゆるやかな長いベイルに身を包んだソラウイ、カロンの姿があつた。

「やあ、朝駆けは日課なんだ。一緒に行く？」

「いつも一緒にいるのだな……フツ……遠慮は無用だ、貴様たちは貴賓だからな、好きなようにするがいい」

「うん、何だか落ち着かなくて……君より先にレネリイ捕まえないといけないからね」

「なるほどな……わかった、おい、この者を通してやれ」

カロンは入り口を警護する翼士兵に告げた。フェレロは礼を言うのと開かれた駐機場へと向かう扉の向こうへと駆け出してゆく。外の光に溶けてゆくそのシルエットを見送るカロンは、傍らのルウラを包みこむ瑞々しい惶の輝きに羨望と嫉妬の念を抱くのであつた。

「蒼の惶波……蒼明のソラウイ……まさか……彼はテレシアと……」

「遅しき者たちよ、今こそその勇を我に示せ！」

王宮の2階部分に設けられた観覧バルコニーに立つネュピアスが高らかに声を上げる。隣接する広場を埋め尽くす群衆の歓声、スタートを見ようとんだれ込んでくる人々にもみくちゃにされながらハナは未だグリッド上に姿を見せないフェレロを探していた。

「……今日、この日に、我がリエラの建国を祝うにあたり、新地漸を拓きたる先達に敬意を表しその志を永く後世へと語り継ぐため、そして彼らの魂がなお我々の中に息づいている事を今一度分かち合うため、ここにジャントウユの開催を宣言する！」

「も……どこいつちゃったの？フェレロ、開会宣言始まっちゃったよ」

流れに逆らってパルクへと向かうハナの上空を、楔型に隊形を組んだライトニングが轟音を響かせながら航過する。今回予選5位までを占めるソラウイの出場機だ。左にターンした編隊は一機ずつ口ーリングしながら離脱して観客の前を通過してゆき、ヒュピアの

機体と操縦者がそれに続く、バンクや急上昇を見せて観客にアピールするマツキナ使いたちの演技に会場の興奮は最高潮に高まった。  
「うをーもう我慢できねえ！パレードなんかいから早くおっぱじめろてんだ！」

「うんうん、昨日のあの子のマツキナすごかったよね！」

「おうよ！翼士隊がなんだってんだ、もうソラウイなんて恐かねえやな！」

「声が大きいよっ……あれ？でも今のパレードの中にあの子いたっけ」

「……えっ？」

王宮の尖塔を遠く仰ぎ見る湖岸に立つ小さな祠、風は草原の花々を揺らしてさらさらと渡り、空へと吸い込まれてゆく惶の揺らめきが七色の放射をフェレロへと投げかける。首府の喧噪を離れた人気がない岬の断崖の上、ソラウイを模した像をその頂点に配した石廟の前でルウラはさつきから楽しげに誰かと語らっている。競技開始前の大切なひととき、けれどフェレロは特に焦るでもなく、ポオと光を纏う小さな相棒を見守っていた。

「クスッ、ルウラはほんとにここが好きなんだね」

「アイ」

「うーん……風が気持ちいいなあ……首府は面白いけど、暮らすのはちょっと疲れそうだね」

「アイアイ」

「最近思っんだ、今のこの穏やかな時って、いつか懐かしく思い出す時が来るのかなって……」

「？」

「うん……なんだかわかんないけど、もうこんな風にのんびり出来なくなっちゃうんじゃないかって……そんな気がするんだ」

「……」

ルウラは顔を上げてフェレロの横顔を見た。ちょっと寂しげな瞳

は遙か上空、ヴーのさらに高い領域を傍視している。ルウラはそとフェレロのほかに寄り添って口づけた。

「ルウラ……うん、大丈夫だよ、僕らはいつも一緒だから」

ドン・ドン・ドン

首府の尖塔の周囲に空砲が轟く。白煙が王宮を包み込み、一瞬ピルケウの水面がざわめいた気がした。

「?……いけない、もうすぐスタートだ。ルウラ、行くよ!」

「ア、アイ!」

コールから10秒、翼士隊のアラートでも不可能な駿さでF/Fは浮上した。鋭い滑走、流麗なフォルムのマツキナは惶のカーテンを切り裂くように湖面を加速してゆく。遙か後方に立ち上る衝撃波の水柱、機首や翼前縁には圧縮された惶が青白く輝き、その際立つ光芒はリベラシオン広場からでもはつきりと視認できるほどであった。海岸沿いの観客たちの目を釘付けにしながらみるみる近づいてくる光の翼。次第に聞いた事もない惶のこだまが会場を硬質な共振で包み込んでゆく。

「き……来たーッ!」

惶輝一閃、F/Fが矢のように広場上空を突き抜けた。わずかに遅れてきた負圧域が切り裂くような衝撃波と共に旋風を巻き起こし、会場は紙や衣服などが舞い飛び大変な騒ぎになった。

「待てーッ! 船券が……俺の船券がッ!」

「くはーッ、強烈な後流だな……飛ばされそうだ!」

「フェ、フェレロ!」

ハナはF/Fの涼やかな惶波の迸りを目にするとあわてて後を追った。最終調整を終え次々とパルクへと戻ってくる各マツキナの整備班をかきわけ、観客席を隔てる柵を制止を振り切ってよじ上り、息を切らせてコースへと戻ってきたフェレロのもとへと駆け寄ったハナはその襟もとをつかんでぐいぐい振り回した。

「どこいったのよーせつかくい位置につけてたのにーパレードででないからこんな後ろからスタートになっちゃったじゃないのーばかばかすごくすごくしんぱいしたんだからーぜえぜえ……」

「ハハ、ごめんハナちゃん」

「……はあはあ……ほんとにもう……あ……そうそう、今回は先導のレネリイがネーロなんだって、追いつくの大変だよ！って、あつ！もう！首つかまないでツ！こそばゆいキャハハやめてやめて自分で戻るからッ」

「あつあつそんな猫みたいに……くす、ハナちゃん、ありがと……」

コース警備の翼士兵につまみだされるハナにフェレロは苦笑しながら軽く手を振った。カロンのライトニングを先頭に2列に整然と並んでスタートを待つ多様な工廠のマツキナ、フェレロはそのグリッドの最後尾にゆつくりと接地して機関の断続器を切った。トーンを下げてゆく圧縮筒の回転音、気がつけば先程まで飛び交っていた歓声はすっかり鳴りを潜め、広場には張りつめた空気がみなぎっている。計時門の中央に設けられたコース状況を告知する旗所、競技開始を告げる審判長の右手が高々と掲げられ、その分厚い手袋にもたれかかった小さな肢体が眩い鮮紅の輝きを放ち始めた。一斉にどよめきの声を上げる観客たち、それを見たフェレロは待機しているルウラに小声で話しかけた。

「紅の惶波だ、でも……普通のネーロじゃないみたい……ルウラと同じ……」

「アイ？」

「うん……たぶん、あの子も特別に強い惶を授かったんじゃないかな。力のあるソラウイに」

操縦者たちは手綱を握りしめ、固唾を飲んでネーロが放たれるのを待った。ジャントウユの決勝は予選とは異なり各々の順位は特に意味を持たない。リエラ建国以前よりこの地で行われてきた荒々しいヒュピアの祭、勝利する為には他機との激しい攻防を制して先行する獲物……ネーロを捕獲しなければならない。フェレロはキャ

ビンの足下に固定したキャプターに手をかけた。

「惶なる命、我とともに……」

鳴り響く銅鑼の乱打。選手の、そして観客の視線が一点に集まる中、審判長の掲げるネーロはやおら立ち上がり目も眩むほどの強烈な閃光を発したかと思うと、大量の燐の飛沫を残して周回コースへと飛び込んだ。号砲が会場を揺さぶり、各機のマツキナに一斉に火が入る。

「狩猟開始だッ！」

丸い天上より差し込む淡い光がプレキシガラスの突出した曲面を流れてゆく。ラーマに点在する惶湖のひとつ、テグ。いつのころからかこの岸边には何処の国籍のものとも知れぬ巡惶艇が擱座していた。もはや森と同化したかのような蒼むした残骸、しかし所々にある窓には仄かな灯りがとまり、随所に集うネーロ達の燐光が暗がり機体のシルエットを浮かび上がらせている。その船内……外観からは想像出来ない程整然としたキャビンの一室で、テレシアは頭上のヴーの空を天測窓より仰ぎ見ていた。妖精機関とは異なる未知なる構造の発動機は随所に破口が認められ損傷が酷い状態であるが、設けられた居住施設を稼働させるだけの惶は湖より得る事が出来るため、この艇はラーマにひとり暮らすテレシアの格好の住居となっているのだった。

「そう……今日はジャントウユの日なのです」

訪問してきたネーロたちの怪訝な顔に、テレシアは普段はあまり見せない笑顔で答えた。

「ええ、さっきまでルウラとお話ししていました。ネーロになってからあの子の声はよりはつきり聞こえるようになって、フフツ、ついついいろんな事を聞いてしまいました……そろそろスタートの間でしょうか。あの子の……出場者みんなの無事を祈りましょう」  
おしゃまなネーロがひとり、テレシアに耳打ちしてクスクス笑っ



た。

「え？フェレロ？……うん、フェレロは大丈夫……昔からマツキナだけはすごく上手でしたから……」

頬を染めて、けれど言葉とは裏腹に不安に曇る瞳、テレシアとてジャントウユがいかにも粗暴で危険な競技であるかは理解しているのだった。示し合わせたように顔を見合わせ、気取られないように機関室へ行こうとするネーロ達をテレシアは引き止めた。

「あなたたち……わかっていてでしょう、あの部屋に立ち入ることはなりません……ええ、気持ちはすごく嬉しい……けど……この船は、もう2度と動いてはいけないのです……」

この森のネーロ達にとってテレシアは母親のような存在、力尽きたレネリイが向かう最期の地として忌われているラーマで、彼女たちはテレシアの加護によってもう一度生きる事を許されたのであった。ソラウイであるが故にこの地を、惶湖のそばを離れることが出来ないテレシアを自由にしてあげたいというネーロ達の願い、しかしテレシアはそれを頑に拒み続けるのだった。

「新地漸の均衡は私が此処にいる事で保たれているのだと思います。今、地上を司っているのは紅の惶、蒼明のソラウイである私が並び立てば再び争いが起こることでしょう。私はヴーの意思に導かれたこの地を離れるつもりはありません……」

胸にあてた手を握りしめ、自らの決意をあらためてネーロ達に問うテレシア。今まで通り淡々と振る舞ってはいるものの、あの日、フェレロとの再会以来、テレシアの表情には少女らしい心の揺らぎが見て取れるようになって、ときおり垣間見せる恥じらいはフェレロへの思慕の高なりをはつきりと感じさせるのであった。テレシアは願う……叶わぬ想いをただ一途に、本当の自分の気持ちに戸惑いながら。

「フェレロ……お願い、無事に帰ってきて……私のもとへ……」

「アイ！」

「くあつ……」

蹴飛ばされたような不意の増速にフェレロは仰け反った。荒々しく内側から体当たりを敢行してきたマツキナの衝角が翼をかすめる、ゲートへ向かつて高速旋回中のF/Fの起こす乱流に飛び込んでしまった先刻のマツキナはコントロールを失い、後続の機体の前下方からもつれあうように接触した。弾け飛ぶ2機の眼前に迫るトンネル、1機はやむなく失格を覚悟でコースを逸脱し湖畔へと逃れたが、もう1機は無理な姿勢でゲートを潜ったため立て直しが効かずトンネル入り口の壁面へ激突した。

「21番ゲート、事故！救急隊急げ！」

旗振りの報告に観客が沸く。後方で微かに聞こえた衝突音にフェレロは顔から冷や汗が噴き出てくるのを覚えた。

「墜ちた？くツ……さっきの加速がなかったら、僕も……」

「アイ」

「助かった、ルウラ、まるで見えてたみたいだね」

「アイアイ」

最後尾スタートにも関わらず、瞬く間にヒュピアの参加機の首位に躍り出たフェレロはコース上前方に並走する4つの紅い惶波の煌めきを認めた。最上位に位置するカロンに迫るための最大の障壁、毎回いつもこの集団に阻まれトラブルで脱落していたフェレロは、今一度手綱をしっかりと握りしめた。

「速度このまま維持、奴らにラインを塞がれる前に飛び込む！10重までかけるよ」

「アイツ」

計時門を先導のネーロが矢のように通過する。やや間を置いてカロンのライトニング、その後を追う翼士隊の4機は緊密な編隊を固め何時ものソラウィ必勝態勢を構築していた。しかし特徴的な蒼の惶波を放つフェレロのF/Fがみるみるその背後に迫る。拳を突き上げて歓声を上げる観衆の中で、ハナも声を枯らして声援を続けた。

「いけー！フェレロ！抜きまくれー！」

「へっ、どうせまたあの『地獄の壁』にやられちゃうさ」

「な、なによーッ！」

「あのつるんだ連中を見ただろ、鳥1匹入る隙間なんかねえぜ！」

「いや……あいつなら……」

最高速に長けたソラウイの乗機、ライトニングは急旋回時に置いてやや抵抗が多く、翼士隊の4機はそこさえ押さえ続けてさえいれば機動性に富むマツキナを駆るフェレロの先行を許さないはずであった。しかし高速域で今までに無い伸びを見せる今大会のF/Fは直線においてもライトニングに大きく引き離される事がないため、ソラウイ勢としては少しでも脱出速度を稼ぐため通常の限界を超えた旋回を行う必要性に迫られる事となった。自分との差がじわじわと縮まり始めたのを察知した首位のカロンは機関に鞭を入れた。

「アテにする訳にはいかんというわけか……チッ」

サンテデボーテからカジノへの飛び込み、フェレロは前日の試走の時から高速でしかも左右の切り返しと上り坂を伴うこの区間で仕掛けることを決めていた。最高速から一気に減速するポイント、ここで前に出られれば続く屈曲部で決定的な差をつけられる。直角に曲がる右へのターン、猛烈な加重がフェレロの体重を支える固定具のハーネスをぎりぎり締め付ける。十分に推力が蓄積されていることを示す石英管の白い輝き、コーナー立ち上がりで放たれる比類ない惶波は先行するライトニング隊を遙かにしのぎ、4機の後流の生み出す広範のドラフティング域もあってその差は一気に縮まった。

「後方警戒！来たぞ！」

「フォーメーションを乱すな」

「内側は確実に締める、当てても構わん！」

緊密な隊形で迎えつつ翼士隊、全機横並びのままりパージュを疾走してゆくその背後にぴたりとついたフェレロは、不圧域のもたらす余剰出力で限界にまで高まった翼車室の内圧計を見てニヤツと笑った。充分に惶波を温存出来たF/Fはマスネの手前でその擁護を

離れ、推力全開で一氣に規定高度ぎりぎりまで急上昇した。即座に反応し接触を試みる翼士隊、しかしフェレロの真意を察知出来ていた者は誰一人いなかった。F/Fはその頂点で鋭く半横転し、今度は地表へ向けて一氣に降下を始めた、一瞬の出来事に翼士隊はフェレロを見失った。

「何処へ?……くっ!」

氣を取られる間もなく迫るカジノ前コーナー、減速を最小限に抑えつつ何とか編隊を維持するライトニング隊を、上空から猛烈な氣流剥離の雲をまき散らすF/Fが稲妻のように貫いた。高度差を利用した空戦機動、速度を殺さずに旋回半径を維持する事が出来る基本的な戦技であるが、この狭い空間で、いきなり訓練もなしに行うのには並外れた技量と度胸が必要である。翼が軽く街路の石畳をかすめ、F/Fは全く速度を落とさぬままミラボーへのアプローチへと飛び込んでいった。

「完璧だッ!」

「アイ」

ライトニング隊がカジノ前を抜けたとき、彼等の前にも後ろにもマツキナの姿は見当たらなかった。ただコース上に漂う蒼の光霧が彼等に自らの失策、ソラウイとしての力の限界を感得させるのであった。瞬時にライトニング4機を抜き去り、さらに決定的な差を築いたヒュピアのマツキナ、F/Fの尋常でない疾さに翼士隊は戦慄した。

「狂ってやがる……いかに隊長とて、あの者を妨げることは容易ではないはず……恐るべし、蒼の惶波よ」

今やカロンとフェレロの間を隔てるものはなく、ここへきて初めて両者は互いに相見える事となった。刻々と変わるコース状況、風速、先導するネーロの気まぐれ……冷静さと剛胆さを併せ持った真の勇者の頭上にこそ勝利者の冠が戴される。両者の機体にそれぞれ存在する長所と短所、しかし今大会においては、F/Fとライトニング、フェレロとカロンの差は殆ど無いとってよかった。周回遅れ

に詰まり僅かに減速してしまったカロン、フェレロがその隙を見逃すはずがない。

「追いついた！カロン！」

「ち、小僧が！」

並走する2機のマツキナは湖岸のポルティエの立ち上がりで渾身の加速を試みる。爆発のごとき惶波の解放は2色の長い軌跡をコース上に絡ませながら各機のマツキナを加速させ、人々は初めて見る光の競演に歓喜の声を上げた。

「すげえ！こんな凄え飛びっぷり見た事無いぜ！」

「戦でもここまでやんねーよ！ったく、震えてきやがったぜ……」

「見る！ネーロに追いつくぞ！」

前に行く紅光に迫るF/Fとライティング、気づいた先導のネーロは渾身の力を振り絞って逃れようとする。しかし先鋒を欲するフェレロとルウラの潜在能力は今や自らの認識を大きく上回るほどに増大しており、カロンをもつてしてもその進出を食い止めるのは困難であった。

「ルウラ！もう少しだ！機体は何とかする、もっと力をツ！」

「アイ！」

「行かせるかッ」

その時、F/Fの機体が淡い青色に発光し始めた。ルウラの生み出す、妖精機関に収まりきれない程に溢れる夥しい惶波の流出は構造体を伝って機体をくまなく覆い尽くして、その姿は開放型の妖精機関とも言つべき形態へと変貌してしまったのだ。純粹な意思是輝く機体の隅々にまでゆきとどき、今やF/Fはそれ自体がトリガー、ルウラとして飛翔しているのであった。その包み込まれるようなコトネの奔流にカロンは圧倒された。

「な……何だ……何が起きたというのだ……」

特徴的な翼士隊の兜越しに見る蒼く輝く鳥の姿にも似たF/Fの機体、それは本来のフォームを内包して長大な翼を広げ、ゆるやかに羽ばたきながら前方へと消えていった。

「ルウラ……うん、君に任せるよ……あの子を助けてあげなきゃね……」

「フェレロ……ルウラ、がんばるからね……ずっとみててね……」  
すでに競技としてのジャントウユは終わっていたのかもしれない。煌々と人々を照らしながらコースを駆けるF/Fはもはやライトニングなど到底及ばない速さで周回を続け、程なく先導のネーロへと追いついた。脅かさないように巡航速度へと減速して横に並ぶフェレロ、そのあたたかい気配に気がつき、振り向いたその先に蒼く放たれる惶波の翼に同族の存在を感じたネーロは、まるで引き寄せられるようにゆつくりとF/Fの側へと近づいていった。

「うん……大丈夫だよ。ルウラはとってもやさしいんだ」

「……ル……ルウラ?……」

フェレロがそつと手を伸ばし、ほんのりと照らされたその小さな身体を支えようとしたとき、後方から憎悪に満ちた紅蓮の波動が煌めいた。

「フェレロ！貴様に先鋒は渡さん！」

急迫する白銀の機体、唸りを上げるその機首の4つの砲門が閃光を發した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8552n/>

---

ウイングテイル

2011年11月2日03時18分発行